みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# The Origin of the Kuril Ainu : An Overview of Study History and Current Perspectives from Archaeology



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2022-12-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高瀬, 克範<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://doi.org/10.15021/00009997 |

岸上伸啓編『環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する研究動向』
国立民族学博物館調査報告　156:99–134(2022)

# 千島アイヌの起源に関する学説整理と考古学からの展望

**高瀬　克範**
（北海道大学）

1　目的と背景
2　北海道起源説
3　サハリン起源説
4　南千島起源説
　4.1　仮説の形成過程
　4.2　南千島起源説の評価
　4.3　地名の理解
　4.4　地名をどのようにとらえるべきか
5　ロシアにおける研究
6　考古学的展望
　6.1　ナルィチェヴォ文化と内耳土器
　6.2　内耳土器の変遷と故地推定の枠組み
7　内耳土器の検討
　7.1　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器
　7.2　ナルィチェヴォ文化との比較
8　結論

## 1　目的と背景

本研究の目的は，1）千島アイヌの起源に関する学説史を整理したうえで，2）考古学の観点からそれらの効果的な検証方法を提示し，3）それぞれの仮説の妥当性について現段階での展望を見通すこと，にある。

千島アイヌは，千島列島中・北部，羅処和島から占守島にかけての先住民である（図1; 鳥居 1903; 1976[1919]）。ただし，この民族が「クリル」の名でロシアの文献に登場

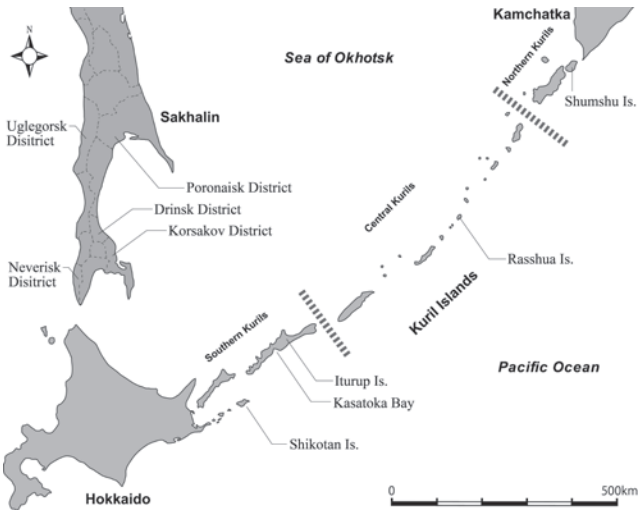



**図1　関連地図**（筆者作成）

した17世紀末〜18世紀前半においては，カムチャツカ半島の南部にも居住していたことが知られており（Оглоблин 1891; Krasheninnikov 1755; Steller 1774），この理解はカムチャツカに分布するアイヌ語由来の地名からも追認されてきた（Murayama 1970）。18世紀半ばから後半においてもアイヌの言語・風習・物質文化はよく保持されていたことが民族誌から確認されており，「紛れもなくアイヌだった」と評価されている（佐々木 2014: 84）。19世紀には物質文化だけでなく宗教などでもロシア人からの影響が高まったとみられる一方で（馬場 1979c など），カムチャツカには居住せず，千島列島のなかだけで生活するようになっていたようである。この間の日本とロシアの国境変更などにともなって，カムチャツカ南端部に移住した家族がいたことはたしかである（Шубин 1992b）。しかし，少なくとも19世紀段階の居住範囲は，千島アイヌ自身からえられた信頼性の高い情報にもとづいて綿密な調査をおこなった鳥居龍蔵（1903; 1976[1919]）の定義のとおり，基本的には千島列島中・北部にかぎられていたと考えるのが妥当である。この範囲のなかで，数ヶ月から 1 年程度で島々を移動する特徴的な居住形態と生業が，1884年の色丹島への強制移住まで実践されていた。

千島アイヌの歴史学的研究は必ずしも活発とはいえないが，19世紀に関しては日本・ロシアの史料をもちいた研究が着実に進展してきている（川上 2011, 2020; 麓 2007, 2011, 2014; コラー 2002; 秋月 2014など）。対照的に，それ以外の時期についてはまだ多くの不明な点がのこされている。たとえば，現在は文化継承者がいないとされる千島アイヌの20世紀の歴史は（村崎 1963），とくに戦後についてまだほとんど明らかになっていない。当事者に近い人々にも影響をおよぼす現代史であるがゆえに，解明にはもう少し時間がかかるかもしれない。逆により古い時期，すなわち18世紀以前の歴史についても多くの解明すべき点が残されている。とくにその起源と出現時期，社会・経済の推移などは，長いあいだほとんど闇のなかにあったといっても過言ではない。

ただし，ここ15年ほどの考古学的研究によって，千島アイヌはより南の地域からの集団移住によって15世紀半ばに形成され，当初はカムチャツカ南部が本拠地であったが，18世紀初頭にカムチャツカの大部分から撤退することで千島列島を中心とする生活に移行したことが判明してきている（高瀬 2015a; Takase 2020）。しかし，どの地域からの集団移住によって千島アイヌが成立したのかについては，まだ明確な答えがえられていない。そこで本論文では，千島アイヌの起源や故地に関わる学説の整理・論評をとおして検証すべき仮説を絞り込み，それらを効果的に検証するためにはどのような方法を取るべきかについて考古学の立場から明らかにする。最後に，もっとも豊富な考古資料コレクションのひとつをもちいて，有望な仮説の妥当性を評価する。

## 2　北海道起源説

これまで提起されてきた千島アイヌの起源に関する学説は，１）北海道起源説，２）サハリン起源説，３）南千島起源説の３つに整理できる。これらの内容を概観し，それぞれの仮説の問題点や妥当性を検討する。

北海道起源説は，もっとも長い歴史をもつ仮説である。鳥居による「２段階移住説」（小杉 1997）は，その代表例といえよう。本州島に居住していたアイヌの一群が，大陸から移住してきたツングース系住民に押し出されるかたちで北海道島へと移住する（第１次移住民）。その後，本州島に残存していたアイヌの一群もまた，のちにツングース系住民に追いやられることで北海道島へと移住する（第２次移住民）。ここで，以前から北海道島にいた第１次移住民は，本州島におけるツングース系住民との交流により鉄器を保持していた第２次移住民に押し出され，環境がより厳しい千島列島への移住を余儀なくされることによって千島アイヌの成立につながった（鳥居 1976[1919]）。第１次移住民は千島列島への移住直前に北海道島にいたと理解されているため，ここでは北海道起源説のひとつとみなしたい。「２段階移住説」は，千島列島やカムチャツカにおける考古学的な情報がまだ非常に乏しいなかで想定されたシナリオではあるが，アイヌ集団がある段階において北千島へ移住することによって千島アイヌが形成されたという点については，研究史上の早い段階から意識されていたことがわかる。ただし，この時点における学史的背景，つまり竪穴住居，土器，石器の利用などからみて千島アイヌは「石器時代」（現在の縄文文化期）の人々の特徴をもっともよく保持している，という人種論的な前提と表裏一体であったという点も忘れてはならない（小杉 1997: 404）。

現在の北海道起源説にはいくつかのヴァリエーションがあるが，もっともシンプルでわかりやすいものは菊池俊彦による理解である。「擦文文化終焉後の13・14世紀という時期はアイヌ民族の領域が拡大された時期であり，アイヌ民族の文化圏が北はサハリン島（樺太）に，東は北千島まで拡大された時期であったと推考されるのである」（菊池 1995a: 355）。北海道島ですでに形成されていたアイヌ民族が，サハリン島や北千島へと居住域を拡大したことによって樺太アイヌや千島アイヌが形成されたとの理解である。13世紀という年代は『元史』巻５のサハリン島関連の記事が主たる根拠になっている。また，14世紀という年代に関して，菊池は次のように述べている。「北千島およびカムチャツカ半島南部の遺跡から出土した内耳土器と回転式銛先の年代は15〜16世紀以降と推定される。（中略）アイヌ民族の北千島への進出と，北千島における文化の交替はすでに14世紀に始まっていたかも知れない。」（菊池 1995b: 347）。考古学的遺物からみて，千島アイヌの形成時期は基本的には15〜16世紀と考えられるが，14世紀にさかのぼる可能性も否定はできないというニュアンスである。したがって，14世紀という年代が具体的な根拠をもとに強く主張されているわけではないが，この発言はのちにみる南千島起源

説の形成過程に関係してくる。

「2段階移住説」にみるように，北海道島から千島列島に進出したアイヌが千島アイヌになったという理解は古くから存在していたが，その過程でオホーツク文化の人々の関与を想定する考え方もある。たとえば，馬場脩（1979b: 115）は，「斯く言ふ内耳土器人とは，明かに北海道島から南千島を経て北上してきたアイヌ人であって，所謂北千島アイヌで，今日の色丹アイヌの祖先である。彼等は後にカムチャダールやロシヤ人の血を受けたとは言ふものの，オホーツク式土器人の血液も多分に有しているものではあるまいかと想像するのである。」と述べている。千島アイヌは北海道島から南千島を経て進出したアイヌの移住によって成立したが，その過程でオホーツク文化の担い手の遺伝子も受け継いだという理解である。

類似した見解は，帯飾や口唇装身具を検討した大場利夫によっても示されている。「オホーツク文化期の遺物と千島アイヌ土俗品のあいだには，一脈の類似がみられる。たとえばオホーツク文化期にみられる骨角製の帯飾は，千島アイヌがもっていたクックルケ（帯飾）とまったく同趣のものである。またいわゆる千島アイヌが近年までもちいたとおもわれるラブレット（口唇装具）とおなじものを，オホーツク文化期のモヨロ貝塚人もかつて佩用していたのではないかという疑いもある。これらの点から，オホーツク文化と千島の類アイヌ文化とのあいだには，かなり密接な交流があったと解される。それは北海道本島におけるオホーツク文化とアイヌ文化との関連以上であったようにおもわれるのである。」（大場 1959: 143）。時間的にはなれた考古学的文化であっても，媒介する考古学的文化があれば文化要素が受け継がれることはあるだろう。大場の理解が成り立つためには，擦文文化がその役割を果たさなければならないが，擦文文化における帯飾には不明な点が多い。南千島・北千島や北海道島の一部からは帯飾らしきものは出土しているが（馬場 1979b; 高瀬・加藤 2016など），その年代が不明であるうえ，機能・用途論的に同一視できるかどうかの検討がまだ十分に行き届いていない。「仮にサハリンアイヌと千島アイヌの共通性の源流をオホーツク文化にまで遡って考えたとしても，それは擦文文化や中世アイヌ文化を経由したものと考えざるを得なくなる」（熊木 2015: 81）という指摘のとおり，その具体的な「経路」を綿密に論じる必要があるがそれに成功している研究はまだない。遺体の頭囲方向，埋葬姿勢，埋葬施設から，オホーツク文化と樺太アイヌ，千島アイヌのあいだの系統的なつながりを示唆する考えもあるが（藤本 1965; 宇田川 1992, 2001），時間的な間隙はやはり埋められてはいない。

大場が着目するもうひとつの装身具であるレイブレットの評価に関しても，肯定できる材料はない。最寄貝塚から出土したレイブレットとされる骨角器（大場 1950; 児玉・大場 1957）は，口唇に固定するための溝が民族例にみられるものよりも幅狭で深く，レイブレットしての使用自体が困難である（高山 1969; 北構 1988; 高瀬 2007）。また，民族誌や民具を参照しても，千島アイヌは基本的にレイブレットを利用していなかったと

考えるべきである。紀元後 2 千年紀の北千島やカムチャツカ南部から安定的に出土する遺物全体を見回しても，千島アイヌによって利用されたと考えられる確実なレイブレットは現時点では存在していない。かりにレイブレットが利用されたことがあったとしても，それは露米会社によってアラスカから中千島に強制移住させられた集団（馬場 1979b, 1979e; Шубин 1992a）からの文化的影響や婚姻などによる部分的影響にとどまったことが考えられ，オホーツク文化から脈々と受け継がれた風習としての可能性を考える必要性は現時点ではない。

千島アイヌの祖先にオホーツク文化の担い手を想定する見解は，近年においても散見される。「千島アイヌは，アザラシやラッコなどの海獣狩猟もさかんに行いました。これらは，アイヌ文化にもないわけではありませんが，オホーツク文化の伝統に濃厚にあるものです。従って，千島列島に残っていたであろう，オホーツク文化の人々の後裔が，道東アイヌの移住と混住して，千島アイヌが形成されたのかもしれません」（平山 2014: 120–121）。「オホーツク文化の人々の後裔」がいつのどこの集団を指すのかが必ずしも明確ではない。かりに北千島内部でのオホーツク文化の残存が想定されているのであれば，現段階でそれを積極的に支持する考古学的な証拠はない。しかし，南千島に残存したオホーツク文化の集団が想定されているのであれば，のちに論評する南千島起源説の考え方と通じる部分がでてくる。

オホーツク文化から千島アイヌへの文化的・遺伝的影響を想定する見解に対して，両集団の交替を想定する意見もある。「アイヌ文化の波及がアイヌ民族の北千島への進出によるものであることは言うまでもないであろう。その過程で，北千島に進出していたギリヤーク民族のオホーツク文化の特徴をもつ文化は内耳土器に代表されるアイヌ民族の文化に取って替わられたのであろう」（菊池 1995b: 347）。近年の千島列島における研究では，オホーツク文化のあと一時的にほぼ無人状態になったのちに，千島アイヌの時期になってふたたび人口が増えることが明らかになりつつある（Fitzhugh et al. 2016）。この点を考慮すると，菊池のようにオホーツク文化が千島アイヌの文化に「取って替わられた」というのは必ずしも適切ではないかもしれない。しかし，両者のあいだに直接的な関係を積極的には認めることができないという意味においては，馬場や大場らよりも，菊池の理解のほうが妥当であるようにも思える。

しかしながら，ここまでみてきた北海道起源説においては総じて理論先行型の議論が展開されてきており，それを支える確たる根拠はほとんどない状況が長く続いてきた。そして，近年の研究によって千島アイヌの出現が15世紀であることが確定したことによって（高瀬 2015a; Takase 2013, 2020），北海道起源説の劣勢は決定的となっている。なぜなら，千島アイヌが成立当初から使用していた土器や竪穴住居といった文化要素は，北海道島ではその数百年もまえに消滅してしまっていたからである。オホーツク文化との関係についても具体的な根拠にもとづかない単なる予測が提示されるにとどまっている

ことから，北海道起源説は検証すべき優先度は相対的に高くはないと結論づけられる。

## 3 サハリン起源説

山浦清（1989）は，村山七郎（Murayama 1970）がアイヌ語の千島方言と樺太方言のあいだに類似点があると指摘していることに着目した。この現象を説明するためのひとつのアイデアとして，オホーツク文化の集団が樺太アイヌに系統的につながるいっぽうで，北千島へと渡ったオホーツク文化の集団が北海道アイヌからの影響をうけつつ千島アイヌになるというシナリオを提起した。北海道起源説といえなくもないが，オホーツク文化の担い手が樺太アイヌと千島アイヌの共通の祖先であった可能性を明確に想定している点で，ここではサハリン起源説の原型と位置づけておきたい。ただし，上述のように，オホーツク文化の担い手と樺太アイヌ，千島アイヌのあいだの直接的な関係を示す確定的な考古学的証拠は現時点ではなく，むしろ否定的な成果が多くえられている。

これに対して小杉康（1996）は，民具，とくに杓子の型式論および分布論的研究にもとづいて，過去のいずれかの段階で千島アイヌと樺太アイヌの直接的な接触が存在したことを予測した。ついで，鳥居が収集した千島アイヌの民具資料の検討から，杓子のほかにも，火道具入れ，煙草入れ，椀などにも，樺太アイヌとの関係なしには説明できない要素が含まれていることを指摘した（小杉 1997）。千島アイヌがサハリン島に起源したことが直接的に主張されているわけではないものの，千島方言の語彙のなかでもとくに天体や親族呼称にかかわるもののなかに樺太方言と類似するものが多いことを指摘した言語地理学的研究の成果（中川 1996）を参照しつつ，千島アイヌと樺太アイヌの民族接触の問題が提起されている。J・スノーがJ・ミルンに語ったところによれば，1879年から1880年にかけて，中千島の松輪島にいた千島アイヌのなかには自分はサハリン島からやってきたと話す人物もいたようである（Milne 1882: 191）。詳細は不明であるが，語彙や民具の類似性の背景には，こうした接触・交流・婚姻などがあったのかもしれない。なお，千島方言の語彙については，村山（Murayama 1970）や中川（1996）とはべつの情報源となる1844年の記録の吟味によっても，北海道方言だけではなく樺太方言とも類似点があることが指摘されている（Sato and Bugaeva 2019）。

このような民具，語彙の研究動向をふまえたうえで，考古学的な資料をも合理的に説明する仮説として，筆者（2013; 2015a; 2015b）は千島アイヌがサハリン島に起源したという仮説も検証すべき価値があると考えた。千島アイヌが19世紀まで用いていた竪穴住居は北海道島では早々と姿を消していたが，サハリン島では近代まで用いられていたからである（山本 1943）。また，サハリン島南部では，少なくとも19世紀まで内耳土器の製作が続いていた可能性が高い（間宮述，村上編 1811; 1855）。こうした点を考慮すると，出現期の千島アイヌが使っていた竪穴住居や内耳土器は，北海道島ではなくサハリ

ン島に目を向けることによってうまく説明することができるようになるため，サハリン島との関係はさらに追究する必要性があるとされたのである。

ただし，サハリン起源説にも問題がないわけではない。その論拠のひとつとなっている民具の検討（小杉 1996; 1997）については，資料の性質上，時間軸をほとんど考慮に入れることができないという弱点がある。くわえて，文化要素の系統性にも，うまく説明ができない点がある。たとえば，千島アイヌの主たる文様である連続山形文や直列鎖状文について小杉（1997）は，北海道島のオホーツク文化の土器や北千島の内耳土器に系譜をたどることができる可能性を指摘している。たしかに，連続山形文は北海道島や南千島出土の刻文期のオホーツク土器にもみられるが（高瀬・加藤 2016など），北海道島やサハリン島の内耳土器にも擦文土器起源の同種の文様が認められる（高瀬・鈴木 2013など）。時間的には後者のほうが新しい可能性も否定できず，どちらが千島アイヌの文様の祖型であったのか，あるいはどちらもそうではないのかを即座に判断することは難しい。

直列鎖状文の評価の根拠として，馬場（1979a; 1979d）が図示したような横位展開の円形の刺突文が施された北千島の内耳土器が念頭におかれていたのかもしれない。しかし，これは新しい段階の内耳土器の文様であり（Takase 2013），少なくとも古い段階にはないものである。この種の文様の起源はまだ不明であるが，比較的新しい段階の内耳土器には口縁部の成形時に当該箇所が指で押圧されることによってあたかも刺突文のように見える事例が少なからず存在することから，成形痕跡が文様に転化した可能性もある（Takase and Lebedintsev 2016など）。この刺突文が直列鎖状文から派生してきた可能性も完全には排除できないが，刺突文の出現以前には土器に直列鎖状文は付されないことから，土器以外の物質文化で用いられていた文様が比較的新しい段階になって土器にも付されるようになったことを論証する必要がある。しかし，現在の考古資料を見回しても，こうした議論に利用できる資料はないと思われる。したがって，千島アイヌの主たる文様とされる意匠でさえ，現時点ではその出現過程を明確にあとづけることができないのが実情である。

とはいえ，土器製作や竪穴住居の使用の伝統が長く続いていたサハリン島は，出現期の千島アイヌとの関係を考えるうえで無視するわけにはいかない地域であることは確かである。北海道起源説にくらべると，サハリン起源説は検証の優先度がはるかに高い仮説である。

## 4　南千島起源説

### 4.1　仮説の形成過程

南千島起源説は，瀬川拓郎によって提起されている仮説である。数段階の変遷をへて

現在にいたっているため，順をおって内容を整理する。

2011年の段階において瀬川は，次のように述べている。「擦文文化は十二世紀ころ終焉を迎え，土器製作の廃止と平地住居化などをメルクマールとするアイヌ文化に移行する。カムチャツカ半島の南端では十四〜十五世紀代のアイヌ文化の遺跡が確認されており，アイヌは道東への進出後，千島を次々北上していったことが理解できる。」（瀬川 2011: 24）。この時点では千島アイヌの故地についての詳しい言及はないが，その内容から北海道起源説とみなすことができよう。カムチャツカ半島における千島アイヌの遺跡の年代として，14世紀が含められているがその根拠は明確ではない。先述のとおり，考古資料を根拠として15〜16世紀とする見解はすでに提出されていたが（菊池 1995b），そこでは14世紀はあくまでも可能性のひとつとして言及されているにすぎなかった。正確にいえば，当時も現在も，14世紀代のアイヌ文化の遺跡はカムチャツカでは確認されていない。

その後，千島アイヌの成立年代は15世紀と理解されるようになった。この変更には，瀬川自身による小人伝説の検討が深く関わっている（瀬川 2013）。瀬川がモデルを千島アイヌとみなしている小人にかかわる伝説は，16世紀前半から確認できる。しかし，日本の史料でラッコの毛皮についての記事が15世紀から登場することから，千島アイヌによるラッコ毛皮の供給はすでに15世紀にははじまっており，したがって千島アイヌも15世紀にはすでに成立しているはずである，と瀬川は理解する。

そして，近年では次のような結論に達している。「アイヌが北千島へ進出したのは一五世紀です。しかし，かれらは北海道本島から北千島へ一気に進出したのではありません。（中略）一一世紀末にはクナシリ島やエトロフ島など南千島までアイヌの進出が進んでいました。そしてこの南千島へ進出したアイヌは，根室海峡周辺や南千島にとどまっていたオホーツク人の残党と同化したことを考古学的に確認することができます。つまり千島列島へ進出したアイヌは，アイヌ文化を担っていたものの，オホーツク人との混血だったのです」（瀬川 2015: 122–123）。北海道島からの進出ではなく，11世紀末までに南千島に進出していたアイヌ［瀬川は奈良・平安時代に並行する北海道島の文化を「擦文文化」，鎌倉時代以降に並行する文化を「ニブタニ文化」としたうえで双方の担い手をアイヌとよび（瀬川 2016），続縄文文化の担い手もアイヌとよんでいる（瀬川 2015）］が，「オホーツク人の残党と同化」したうえで15世紀に北千島へ移住したというシナリオである。道東の擦文文化の住居のなかに石囲炉，樹皮葺き，斜めのカマドなどを有するものがあることが，「同化」の根拠になっているものと思われる（瀬川 2016: 135）。

また，「『ペツ』を用いていた道央の太平洋沿岸のグループが道東の太平洋沿岸を広く覆います。さらにかれらは南千島を経て，一五世紀には北千島へ進出します。これら地域には『ペツ』地名が残されることになりました。」（瀬川 2015: 77–79）という記述にみられるように，もともと北海道島東部の太平洋側や南千島にいた集団が千島・カムチャ

ツカへと移住したとの理解が示されている。「ナイ」と「ペツ」はともにアイヌ語で川を意味するが，千島アイヌの居住域では「ペツ」のつく地名だけが記録されている（Murayama 1970; 村山 1987）。北海道島の太平洋側や南千島でも「ペツ」地名が多いため，そこが千島アイヌの移住前の故郷であったというのが瀬川の見解である。

## 4.2 南千島起源説の評価

瀬川による南千島起源説は，考古学だけではなく地名や口承伝承などの研究成果を統合して導かれた仮説であるが，以下のような問題がある。

第1は，小人のモデルを千島アイヌとする前提である。土の採取や沈黙交易という行為をもとに小人が千島アイヌと関係づけられているが，これらの主体はオホーツク文化や続縄文・擦文文化の担い手であったとしても不都合が生じることはなく（菊池 1984; 石附 1986; 樋口 1996など），樺太アイヌも候補になりえるであろう。しかしながら，こうした可能性を排除することが可能であり，千島アイヌだけが小人に対応する集団であることが論証されていない。千島アイヌが小人伝説をもたないこと自体が，そのモデルが千島アイヌであることの根拠ともされている（瀬川 2013）。だが，千島アイヌの口承伝承や儀礼の体系が，ユカㇻや熊祭りを欠くほど他地域とは異なっていることを考えると，この文脈で小人伝説の欠落が積極的な根拠になるとは考えにくい。

関連して，小人を千島アイヌとみなす見解は鳥居龍藏のアイデアであるが，瀬川はその点に触れていない。「蝦夷のコロポックルは『竪穴住居人』，すなわち蝦夷に最初に移住し，ついで北千島へ渡ったアイヌ＝クシ以外の何者でもないのである」（鳥居 1976[1919]: 494）や，戦後も繰り返されるおなじ趣旨の発言（鳥居 1953）は，「日本民族」やアイヌの形成過程に関して鳥居が描いていた見取図（鳥居 1976[1919]）からすればある意味で必然的な帰結である。にもかかわらず，この点に一切言及されていないのは，学説以前の問題である。

第2は，日本列島におけるラッコ毛皮に関する理解である。瀬川の議論では，日本の史料でラッコの記事が15世紀からみられる事実が重要な役割を果たしている。しかし，これは本州島でラッコの毛皮が15世紀から利用されはじめたことを示すわけでは当然ない。また，ラッコの毛皮が千島列島から供給されたことを意味するものでもない。平均気温が低下していた時期，あるいは寒流（親潮）が優勢な時期には，北海道島ではその南部でさえ遺跡からラッコが出土することは珍しくはない（添田他 2018）。すでに小氷期にはいっていた15世紀には北海道島でもラッコが捕獲されていた可能性が十分に想定できることを考慮すると，最古のラッコ記事が千島アイヌの成立年代を推定するための手がかりになるとは思えない。小人伝説は16世紀前半からみられるものの，ラッコの記事を考えあわせると千島アイヌの成立年代はもう少しさかのぼった15世紀になるはずだ，という主張はかなり乱暴な議論であるといわざるをえない。千島アイヌの成立時期を15

世紀とする瀬川の結論自体は考古学的な成果と合致しているものの（Takase 2013など），これは偶然の一致である。

第3は，議論の枠組みである。瀬川の検討では，小人伝説が記録された年代を根拠として，あたかも物質文化の変遷をたどるかのように伝承の変化が読みとられている。しかし，語りの目的や背景が多様であった口承伝承をそのコンテクストから切り離し，それ自体が何らかの一貫した秩序や性格をもった資料であることを前提として比較することは本来できないはずである。こう考えると，小人伝説には実在のモデルがいて，それが誰なのかを具体的に言い当てることができるという前提自体にも疑問をもたざるをえない。

「アイヌ」と「オホーツク人の残党」の「同化」については，たしかに竪穴住居や内耳土器を素材として検討することはできるかもしれない。しかし，具体的な年代がわかる資料が肝心の南千島にほとんどなく，とくに重要な15世紀前半およびその直前の状況はまったく不明といっても過言ではない。さらに，古い段階の千島アイヌの竪穴住居には方形の石囲炉やカマドがないため，瀬川が着目している南千島における特徴との直接的な対比を行うことは現時点においては難しい。

### 4.3 地名の理解

瀬川が，南千島や北海道島東部太平洋側の集団が千島・カムチャツカに進出したと考える根拠とした地名についても吟味する。類似の議論は，本州島東北部おける古代蝦夷の成立過程を明らかにすることに主眼をおいた松本建速（2013; 2015; 2020）の研究でさきに展開されている。松本の研究は千島アイヌの歴史解明を目的としたものではないが，瀬川の議論の評価にあたっては松本の研究との相違点が重要になってくる。そのため，松本の議論の概略をさきに紹介する。

松本（2013; 2015; 2020）は，本州島東北部でアイヌ語系地名が分布するようになったのは，アイヌ語系の言語を使用していた続縄文集団が5世紀前半までそこに住んでいたからだと考える。しかし，5世紀後半から6世紀にかけて本州島東北部の北部からは遺跡がなくなり，ほぼ無人状態になったとみる。7世紀になるとふたたび集落遺跡が現れるが，そこに住んだ人々は末期古墳，ウマ・馬具，草原を維持するための火入れ，製鉄技術，文字，農業などを有していた。それ以前にこの地域にいた人々の文化要素とは明らかに異なるため，松本は南から農耕牧畜民が移住してきたとみている。この移住者たちは同時期の北海道島の人々と交流があり，交易などで本州島にやってきた彼・彼女らの祖先がかつてそこで使っていた地名を聞き取ってそれを継承し，現在までの淘汰をへてアイヌ語系地名が本州島東北部に残存した。これが松本の描くシナリオである[1)]。

瀬川の理解も，全体として松本のそれに近い。しかし，瀬川は，本州島東北部における「ナイ」地名と「ペツ」地名の分布の違いに注目する。「ナイ」地名はより南まで分布

しており，現在の宮城県中部から山形県中部にまでみられる。これ対して「ペツ」地名は分布域がよりせまく，宮城県北部・岩手県南部〜秋田県中部が南限となっている。瀬川はこの分布の違いを考古資料の分布と関連づけて説明しているが，松本はこの点をとくに問題視してはいない。ここが両者の研究内容の大きな違いである。

瀬川は，「ナイ」地名の分布を，続縄文文化後期の後北$C_2$・D式土器（紀元後3〜4世紀）の分布に近いと考える（瀬川 2015; 2016）。当時，北海道島の続縄文文化の担い手は石器の利用を減らしつつあるかわりに，本州島東北部を介して鉄器を輸入して生活していた。そのため，交易の重要性がたかまり，頻繁に本州島東北部の北部をおとずれていた（石井 1997; 高瀬 2014）。なかには，そこに住み着いていた人もいたことが，青森・岩手・秋田県域から見つかる続縄文文化の墓から理解できる。本州島東北部の北半では後北$C_2$・D式土器がしばしば出土するが，瀬川はこの土器の分布と同じように「ナイ」地名も4世紀以前に本州島東北部および北海道島にひろがっていた地名と考える。これに対して，「ペツ」地名の分布はその次の段階の土器型式である北大式土器の分布に近いことから，「ペツ」地名は北大式土器が使われた5世紀に命名されたと考える。このアイヌ語系地名が分布していた地域には，やまと言葉をつかう古墳文化集団が5〜6世紀にかけて北上してくる一方で，続縄文集団は6世紀までに北海道島へと撤退する。こうした集団の入れ替わりのなかで，古墳文化集団がすでに存在していたアイヌ語系地名を借用したことによってそれが残存した，とみる。さらに瀬川は，こうしたアイヌ語系地名の分布が近現代にいたるまでどのように変化してきたのかを考古資料の分布などと関連づけながら推定し，北海道島太平洋側や南千島にいた人々の一部が千島アイヌになったという理解にまでつなげているのである（瀬川 2015）。

ただし，地名と土器型式の対応関係は疑わしい。本州島東北部では，北大式（とくに北大I式がここで該当する）の分布域は，後北$C_2$・D式のそれよりもたしかにせまい。しかし，「ナイ」地名の分布域は墓の存在や遺物の出土量から推定される後北$C_2$・D式土器を利用する集団が安定的に居住していたと考えられる範囲（青森県域および岩手・秋田県の北部）よりも明らかに広い。続縄文土器は出土するものの，それを用いていた集団が長期間にわたって居住していないばかりか，交易などのためにあくまでも一時的に訪問していたにすぎない宮城・山形県域の地名を命名することはありえるだろうか。たんに土器が分布するという事実だけでなく，そこにどのような集団が居住し，どのような活動が行われていたのかまでを考慮したとき，こうした理解がなりたつのか疑問である。同様の理由で，瀬川が5世紀になって現れたと考える「ペツ」地名が，北大式土器を使う続縄文の人々によって命名されたと考えることもかなり難しい。北大式の使用者が安定的かつ長期的に居住した地域とみなすことができるのは青森県域と岩手県域の北半部だけである。ところが，「ペツ」地名は岩手県域の南部，宮城県域，秋田県域にも分布しているのである。

瀬川の理解は，土器型式が後北C$_2$・D式土器から北大I式へと変化したのと同じタイミングで，「川」を指す語彙が変化したことを意味している。おそらく，土器型式の変化は数年〜10年ほどのあいだで生じたが，この時間幅のなかで特定の単語が変化する確率はどの程度なのか。あくまで参考程度の試算にすぎないが，瀬川や松本も参照する言語年代学の前提，すなわち基礎語彙残存率81％（服部・知里 1960; 安本・野崎 1976）を用いて，紀元後1千年紀のなかで瀬川の理解が生じる確率を考えてみよう。この残存率のもとでは，基礎語彙200語のうち1000年間に変化するのは38語である。かりに時間幅（土器型式の変化が完了する期間）を10年間とすると，この間に変化する語彙は38語×10年／1000年で0.38語，そこに「川」の一語が入る確率は0.38/200語＝0.0019である。1000年間のなかで，この変化が後北C$_2$・D式から北大I式の変化点に相当する特定の10年間に生じる確率は，0.0019×10年/1000年でおよそ52,000分の1である。条件を緩和して時間幅を5世紀全体の100年間に拡大した場合，同様の計算により確率は約520分の1となる。実際にはありえないが，もし同じ歴史的状況が何度も生じることがあるとするならば，それが500〜5万回繰り返されることでやっと1回生じる程度の確率である。瀬川が想定している地名と土器の対応関係の成立が，いかに困難であるかがわかる。なお，アイヌ語系地名の分布が松本や瀬川の想定よりもかなり広いことを指摘した八木（2019）は，それが遅くとも縄文文化後・晩期（約4400〜2400年前）には存在していたとの解釈が可能であることを示している。続縄文の物質文化とアイヌ語系地名を結びつける理解は，少なくとも唯一の説明にはならないのである。

### 4.4 地名をどのようにとらえるべきか

とはいえ，カムチャツカ南部や北千島では「ペツ」地名しかなく，サハリン島では「ナイ」地名しかない，あるいは西蝦夷地と東蝦夷地にあたる地域で地名の出現頻度にちがいがある，この事実は無視してよいものではないであろう。

あらためて注意が必要なのは，「ナイ」「ペツ」地名が北海道島内で排他的に分布するわけではなく，サハリン島ですら古語では「ペツ」が用いられていたとされている点である（山田 1983; 大塚他 2008）。「ナイ」と「ペツ」はおもに川の大きさによって使い分けられるとされるが（山田 1983），その実際の用法は一律ではない。「ペツ」は川一般と大きな川，「ナイ」は小さな川をさすという説明が多いが（山田 1983; 中川 1995; 萱野 2002など），「ペツ」は氾濫のたびに流路が変わるような浅い川，「ナイ」は増水しても流路が変わらない深い川を指すというべつの解説もある（磯部 1936）。もちろん，「ペツ」が多い太平洋側でも「ナイ」が多数みられる川もあり，「ナイ」が優勢となる日本海側・オホーツク海側ではその逆もみられる（山田 1983）。

このような複雑な実情は，川の規模，流域の地形，本・支流の呼び方に関わる認識・慣習が決して一様ではなかったことを示している，とまずはとらえられるべきであろう。

こうした着想のもとで，実際の川の性質や地形と単語の選択性のあいだに一定のパターンがあるかどうかを慎重にみきわめる研究はあってもよい。しかし，このような基礎的な手つづきを飛び越えて，語彙の新旧関係を判断したり，分布を土器と重ね合わせたりするのは危険である。対照的に，言語や地名の研究者はこの種の議論にはきわめて慎重である。瀬川（2015）は，知里真志保や山田秀三が，自身の考えとは逆に「ペツ」から「ナイ」への時間的変化を考えていたことを紹介している。しかし，山田秀三は「但しこれはもちろん想像談」（山田 1983: 243）とあくまでも可能性のひとつにすぎないことを書き加えることを忘れておらず，それ以上，推測に推測を重ねることはしていない。ましてや，その推測を民族の起源にまで結びつけるような議論は行っていない。

瀬川の研究は，着想の独創性やスケールの大きさの面で注目すべき内容を数多く含んでおり，南千島起源説はそのなかのほんの一部にすぎない。しかし，少なくとも千島アイヌに関連する説明については，筆者には納得できる部分がほとんどない。よって，瀬川が提起している南千島起源説は現時点での検証の優先度は高いとはいえないが，筆者はそれでもなお，考古学的な観点から南千島には一定の重要性があるとみている。この意味での南千島起源説は検証すべき価値があるが，詳細は後述する。

## 5　ロシアにおける研究

ここまで，ロシアおよびソヴィエトの研究についてはほとんど触れてこなかった。それは，17〜18世紀の文字記録に残る「クリル」が純粋なアイヌであるのか，カムチャダールの影響を受けたアイヌであるのか，逆にアイヌの影響をうけて文化的に変容したカムチャダールであるのかといった点が議論されてきた一方で（Jochelson 1928; Руденко 1948; Долгих 1960など），千島アイヌの起源そのものに関する議論は実質的には行われてこなかったからである。しかも，1960年代まではカムチャツカのみならず千島列島でも非常に資料が少なく，いずれの議論も表面的な考察にとどまっていた。

こうした状況を打破することを目的として実施されたのが，タマーラ・ディコワによって指揮された1970年代のカムチャツカ南部の大規模調査である。このプロジェクトの結果，カムチャツカ南部においては北千島にいたアイヌからの文化的影響は部分的にはみられるものの純粋なアイヌ文化は存在しておらず，アイヌの居住を積極的に認めることも難しいと結論づけられた（Дикова 1983）。ただし，菊池（2004: 202）が本書の内容は実質的には発掘調査の報告であり，論考篇がともなっていないことを指摘しているとおり，ディコワの議論ではデータと結論が大きく乖離している。結論は，新たな調査によってえられた大量の資料の十分な検討をへて導かれたものとは必ずしもいえず，カムチャツカにアイヌはいないという当時の民族学・人類学的，政治的な前提と対立しない予定調和的で暫定的な結論であったと受け止めたほうがよいであろう。

ディコワが1981年に若くしてこの世を去らなければさらなる研究の進展が期待できたはずであるが，そのあと，この研究を実質的に引き継ぐ者がおらず，資料も十分に整理・公開されてこなかった。このため，ディコワの発掘資料がもつ本来の学術的な価値が十分に吟味されないまま，千島アイヌに関係する考古学的研究はソヴィエトではほぼ停止した。その結果，ディコワの暫定的な結論だけが継承されることによって，現在の目からみれば明らかに千島アイヌがのこした紀元後２千年紀の資料を古イテリメン文化の一部に組み込んだ枠組みが定着することとなった（Пономаренко 1985; 2000）。こうした状況のなかで，カムチャツカにおけるアイヌの問題に正面から向き合う研究はしばらくなくなった。

千島列島では，1990年代の末から2000年代にかけて，サハリン郷土博物館とワシントン大学が中心となって２つの大きな学際的プロジェクト（International Kuril Island Project（IKIP），Kuril Biodiversity Project（KBP））が実施された（Fitzhugh et al. 2004; 2007; 2009a; 2009b）。しかし，研究の主目的が必ずしも千島アイヌの歴史解明にあったわけではなかったことにくわえて，北千島で回収された資料数がかなり少なかったこともあって，このプロジェクトによって千島アイヌの研究が大きく前進したわけではなかった。これに対して，近年，北海道大学，サハリン郷土博物館，ワシントン大学が北千島で実施した共同調査（Kuril Ainu Archaeology Project（KAAP））は千島アイヌに焦点をあてたものであり（Такасэ и др. 2017），これによって上記 IKIP や KBP でえられた資料よりも多数の考古資料が北千島から回収されることとなった。IKIP や KBP の資料とおなじように，人工遺物はサハリン郷土博物館，動物遺存体はワシントン大に保管されており，今後，千島列島全域をカバーする最大の考古コレクションといってよいこれらの資料を活用した研究が加速していくことが期待される。

ディコワの発掘資料は，いまなおカムチャツカ南部で最大の考古コレクションであるが，近年，人工遺物が再整理され，ようやくその全貌を把握することが可能となった（Takase and Lebedintsev 2019）。自然遺物についてもその詳細の公表が準備されており，将来的にあらゆる研究者がすべての資料を利用しやすくなると思われる。カムチャツカ半島におけるあらたな発掘調査も，資料の着実な増加に大きく貢献してきた。北海道大学，カムチャツカ国立大学，カムチャツカ郷土博物館が実施してきたカムチャツカ南部の調査資料はすべてカムチャツカ郷土博物館に保管されており，出土遺物だけでなく，遺構の情報や年代測定例などもここ15年ほどで飛躍的に充実してきている（プタシンスキー／高瀬 2006, 2007, 2008; Пташинский 2012など）。一度は千島アイヌと距離をおいたロシアの考古学ではあるが，こうした土台のうえに，今後，ディコワの問題意識をふたたび掘り下げようとする研究者がでてくることを期待したい。

# 6　考古学的展望

## 6.1　ナルィチェヴォ文化と内耳土器

上記の学説整理をふまえて，有効な仮説検証の方法と，現在の資料からみた展望を，考古学の観点から整理しよう。

物質文化をもちいて歴史を復元する考古学において，資料は型式論（typology）によって型式に分類され，理化学的年代測定法も併用しつつ地域内における型式の相対年代・絶対年代が確定される。さらに地域間の比較により，その時間的・空間的序列が編成される（編年，chronology）。そのうえで，同じ時期，同じ地域で用いられている型式の組合せは，考古学的な文化（culture）として把握される。考古学的な文化は一部の例外をのぞいて特定の社会集団に対応することはなく，実際，同じ民族・部族でも異なる型式や考古学的文化がみられることもある（Hodder 1991など）。考古学的文化の背後にその担い手となる人々はいたにちがいないが，それが民族，部族，氏族，国民，言語集団などに対応する保証はない。

しかし，カムチャツカ半島南部から千島列島北半にかけて確認されているナルィチェヴォ文化（Nalychevo Culture）（Диков 1979）は，千島アイヌにほぼ対応するとみなすことができる例である。すでにみたように，ディコワは両者の結びつきに否定的であったが，現在の理解ではナルィチェヴォ文化の担い手は千島アイヌであったと考えざるをえない。その理由として，第一に，ナルィチェヴォ文化に含まれる物質文化は，カムチャツカ半島ではなく，北海道島やサハリン島の考古学的アイヌ文化と共通するものがほとんどである点があげられる。カムチャツカの物質文化の変遷からみれば，明らかに外部からやってきた文化伝統を異にする集団によって残されたと考えざるをえない。15世紀以降でこうした条件にあてはまる集団は，千島アイヌとその祖先集団（「クリル」）しかいない。

第二に，カムチャツカ南部では土器づくりの伝統が先史時代を通じて存在しない。イテリメンの民族誌が示すように，この地域では木製容器をつかったストーンボイリングによる加熱調理が完新世を通して一般的だったのであろう（Krasheninnikov 1755など）。しかし，カムチャツカ南部の考古学的文化のなかでは，ナルィチェヴォ文化にだけ数多くの土器が含まれている。この地域では，これが最初で最後の土器であり，ナルィチェヴォ文化の担い手がやはりカムチャツカ南部の文化的伝統の外にあったことは明白である。

第三に，北千島における人口変遷は，ナルィチェヴォ文化直前のこの地域が無人かそれに近い状態であったことを示唆している（Fitzhugh et al. 2016）。同じ時期の遺跡はカムチャツカ南部でもほぼ皆無であり，やはり無人かきわめて人口が希薄であったと考えられる（高瀬 2015a）。カムチャツカ南部では，タリヤ文化（紀元前１千年紀）→クロノ

ツキー文化（紀元後1千年紀）→ナルィチェヴォ文化（紀元後2千年紀）という大まかな考古学的文化の変遷が確立している（Пономаренко 1985）。このうち，クロノツキー文化の実態は不明で，カムチャツカ半島中央部には分布しているかもしれないが，南部には分布していない可能性が高い。したがって南部では，タリヤ文化とナルィチェヴォ文化のあいだにかなり大きな時間的間隙がある（高瀬 2015a: Takase 2020）。そこに，15世紀半ばになってナルィチェヴォ文化の遺跡が突如として多数出現するのである。したがって，ナルィチェヴォ文化の担い手はもともとこの地域にいた人々ではなく，外から移住してきた人々であったと考えざるをえない。ほぼ無人の地への入植であったがゆえに，移住もしやすかったと考えられる。

ナルィチェヴォ文化に含まれる土器，銛頭，魚鉤，骨鏃，帯飾などは考古学的アイヌ文化にその起源を求めることができ，それ以外の説明が成立する余地はない。また，日本列島産の製品（鉄鍋，キセル，寛永通宝など）も豊富である点は，ナルィチェヴォ文化の担い手が南から移住してきたこと，そして移住したのちも南から物資を入手し続けていたことを示している。紀元後2千年紀のカムチャツカ半島北部にどのような物質文化が広がっていたのかは必ずしも明確にはなっていないが，少なくとも現在までに知られてきている人工遺物でナルィチェヴォ文化に関係しそうなものは皆無といってよい（Васильевский 1971; Takase 2014）。橇やスキーのように，カムチャツカ半島の他の先住民からの影響によって千島アイヌに取り入れられた物質文化もたしかにあったが（鈴木 2017），それはおもにロシアや露米会社からの影響が強くなった19世紀以降の出来事である。もともとカムチャツカの文化要素であったもので，それ以前からナルィチェヴォ文化に取り入れられていたことが確実な道具は石ランプくらいであろう（鈴木 2014）。それ以外の物質文化は，北海道島，サハリン島，南千島にルーツをもつもの，あるいはそうした地域を経由して運搬されてきた日本列島産の物資である。

このような特殊な条件からみて，ナルィチェヴォ文化は千島アイヌがのこした考古学的文化と考えることができる。このうち，千島アイヌの起源や出現期の様相を考える際にもっとも有効性が高い資料は，ナルィチェヴォ文化を代表する文化要素のひとつである内耳土器である。遺跡の立地にかかわらず普遍的に存在しており，それ自体から年代を判断することができるからである。内耳土器は中世日本の鉄鍋の模倣品であり，鉄鍋と同じように内側に紐で吊るすための耳がついている。本州島から運ばれてきた鉄鍋は，北海道島，サハリン島南部，千島列島でも使われていたが，とくにサハリン島や千島列島，カムチャツカ半島では必要な鉄鍋の不足分を補うために，鉄鍋の形態を模した土鍋が積極的に製作された。カムチャツカ南部と北千島では，ナルィチェヴォ文化の成立当初からこの内耳土器が重要な構成要素となっており情報量が多い[2)]。このほか，銛頭も有効な資料となりえるが，おもな素材が角・骨であるがゆえに標本数が少なく，内陸部からの出土も期待できない。このため，内耳土器ほど踏み込んだ検討は難しく，やはり

内耳土器が最重要の資料となる。

## 6.2 内耳土器の変遷と故地推定の枠組み

ナルィチェヴォ文化の内耳土器は，古いものからIa，Ib，II，III式の順に編年されている（Takase 2013）。年代は，Ia式が15世紀半ば〜17 世紀，Ib式が17世紀，II式は18世紀初頭から〜18世紀後半である（Takase 2013; 2020）。III式の具体的な年代は不明であるが，18世紀のなかに収まると予測されている。

Ia式は，中世日本の鉄鍋との形態的類似性が高い。すなわち，薄い器壁，口縁部の段，口縁部内面の幅広で浅い溝，小さめの内耳，文様がつかない点などが特徴である。これに対して，II式は分厚い器壁，段のない単純な器壁，口縁部の突起，大きく粗雑に作られた内耳，口縁部に施された文様をもつ。鉄鍋の精巧な模倣品として出発したナルィチェヴォ文化の内耳土器は，300年ほどをかけて粗雑でもともとの鉄鍋からかけはなれた土鍋へと変化したのである。Ib式は，Ia式とII式の特徴を個体内にあわせもっており，年代もIa式とII式の中間に位置づけられることがわかっている。

Ia式の年代は，千島アイヌの出現が15世紀半ばであったことを示している（Takase 2013; 2020）。ナルィチェヴォ文化の分布からみて，Ia〜Ib式の段階，つまり15〜17世紀には，千島アイヌは北千島のみならずカムチャツカ南部の広い範囲にも居住していたことが判明している。しかし，カムチャツカ半島における居住範囲は18世紀初頭に急激かつ大幅に縮小し，19世紀までに基本的に千島列島内にとどまる生活に移行した（高瀬 2015a; Takase 2020; Takase and Lebedintsev 2016）。

千島アイヌの起源の考察にとってもっとも重要な考古資料は，最古の内耳土器であるIa式である。ナルィチェヴォ文化の担い手は15世紀半ばにカムチャツカ南部や北千島にやってきた人々であり，移住当初から土器を作り，使っていた。しかも，その土器は鉄鍋をかなり忠実に模倣したもので，器壁が薄く，表面の調整も丁寧であるなど，もともと土器づくりに精通していた人々でなければ製作が難しいと思われるものであった。つまり，15世紀半ばもしくはその直前の段階で，内耳土器をさかんに製作しており，なおかつナルィチェヴォ文化のIa式の祖型となりえるような土器──鉄鍋の忠実な模倣品としての内耳土器と予測される──が数多く分布している地域が特定できれば，そこが千島アイヌの故郷と判断できることになる。これが，現時点でもっとも有効性が高く，かつ現実的に実行可能な千島アイヌの故地推定の方法である。

こうした検証が必要となるのは，内耳土器が分布する北海道島，サハリン島，南千島である。ただし，カムチャツカや南千島の内耳土器とその他の地域の内耳土器のあいだには，地域差が存在していることはあらかじめ考慮に入れておいたほうがよい。たとえば，ナルィチェヴォ文化の内耳土器は口径が30cm以上のものが多いが，サハリン島，北海道島，南千島の内耳土器は口径がそれよりも小さいものがほとんどである。また，内

耳の数はナルィチェヴォ文化で3～4個であるのに対して，それ以外の地域では2個が一般的である（長田 2008）。こうした地域性はかなり明確であり，例えばカムチャツカ・北千島の内耳土器の祖型を見出すために，口径が30cm以上ある土器や，3～4個の内耳をもつ土器を北海道島，サハリン島，南千島で見出すことは困難であることはすでにわかっている。したがって，このような定量化可能な属性に目をむけるよりも，質的な特徴の類似性を手がかりにしたほうが生産的な議論ができると予測される。

この点をふまえて，千島アイヌの故郷としての各地域の潜在的な可能性をさぐってみよう。すでに述べたとおり，北海道本島が千島アイヌの故郷になる可能性はほとんどない。千島アイヌが出現する15世紀よりもはるか前に土器製作は基本的に行われなくなっており，本州から供給される鉄鍋の量も多かったために，内耳土器が製作されるとしてもそれはあくまでも例外的な存在でしかないからである。くわえて，ナルィチェヴォ文化を特徴づける竪穴住居の利用も，北海道島では土器製作の停止時期とほぼ同時に停止されている。型式論的にみても，ナルィチェヴォ文化のIa式と類似する内耳土器を北海道島で見出すことはできない。北海道島で比較的古く位置づけられる内耳土器には擦文土器に由来する文様が施されるものもあるが（高瀬・鈴木 2013），カムチャツカ南部・北千島の古い段階の内耳土器には文様はつかない。北海道島の内耳土器は，通常，口縁外面に段はみられず，幅広で浅い溝が口縁内面側にめぐることもない。ライトコロ川口遺跡例（東京大学文学部考古学研究室編 1980），円山例（鳥居 1901），米沢屋敷跡例（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2001）など，こうした特徴がみられる資料もあるが，それらには丸みを帯びた厚い器壁，水平方向の内耳，近い位置に並べて付された内耳がある点などでナルィチェヴォ文化のIa式との隔たりはかなり大きい。

これに対して，サハリン島南部は内耳土器の出土量が非常に多く（長田 2008），有力な候補地のひとつになる。この地域では，内耳土器の編年が確立しているわけではないが，間宮林蔵の記録にもあるような土器が当時使われていたものであるとすれば（間宮述，村上編 1811; 1855），長期にわたって内耳土器が製作されていた可能性がある。また，樺太アイヌが竪穴住居を冬期の住居として利用し続けていたことも知られており（山本 1943），この意味においてもナルィチェヴォ文化の要素と共通性が高い。

南千島における考古学的文化の変遷は，北海道島東部との共通性が高い。しかし，アイヌ文化期については情報がまだ非常に少なく，千島アイヌ出現直前のこの地域にどのような物質文化が分布していたのかはほとんどわかっていない。ただ，それだけに千島アイヌの起源地として検討の候補からあらかじめ外してしまうわけにもいかず，カムチャツカ南部や北千島との地理的な近さや生態的条件の類似性からみても，むしろ潜在的な可能性を追求する余地はのこされている。とくに沖縄本島（1,207平方km）よりもはるかに大きい国後島（1,490平方km），択捉島（3,168平方km）には，移住者がでるほど多くの人口が居住していた可能性は捨てきれない。この地域から，14～15世紀前半の遺

物や集落遺跡などの詳しい情報がもたらされれば，千島アイヌの故郷探索にとってはこのうえない資料となることは間違いない。とはいえ，それはすぐに実現されるものではなく，現時点で過剰な期待をかけることもできない。したがって，将来の新資料の出現を待つだけでなく，現時点で利用可能な資料を検討しなおす必要があるのであるが，そこで土器の型式論的考察が重要な役割を演じるのである。

つぎにサハリン島南部と南千島から出土した内耳土器の観察をとおして，千島アイヌの故郷について現時点での展望を見通すこととしたい。

## 7　内耳土器の検討

### 7.1　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器

サハリン州では，サハリン国立大学や各地の博物館などに内耳土器が保管されていることがわかっているが，筆者自身，すべての資料を調査しきれているわけではない。ここでは，日本領時代の資料もふくめてサハリン州内から出土した内耳土器をもっとも多く収蔵している機関のひとつであるサハリン郷土博物館に収蔵されている資料をとりあげ，予察的な検討を行いたい（図２～図７）。

図2-1（ネヴェリスク地区出土）は，欠損している底面以外はほぼ完形の土器である。内耳ではなく，二個一対，計４個の孔が口縁部にあけられており（焼成前穿孔），これを利用して炉のうえに吊るされたと考えられる。厳密にいえば内耳土器ではないが，利用法や形態がそれに近く，時期も重なる可能性が極めて高いと考えられることから図示した。石膏による復元では，底面は鉄鍋のようにやや丸底になるように復元されているが，これにはとくに根拠があるわけではないだろう。丸底の内耳土器はこれまで確認されていないため，図上では平底として推定復元している。非常に丁寧に製作されており，器壁は0.5～0.6cmと薄い。形態は内耳鉄鍋の形態を良く再現しており，口縁部内面の幅広で浅い溝，口縁部外面の段も明確に表現されている。口縁部の突起はなく，外面の一部に付着炭化物が確認できる。

図2-2は，口縁外径が14.7cmの小さめの内耳土器である（ネヴェリスク地区出土）。内耳は２単位で，内耳の上端は口縁部よりも高い位置にでている。口縁部の内面には幅広で浅い溝が明確に確認できる。口縁外面に段は確認できないものの，口縁部と胴部の境界は明確に区別されている。図2-3，４はともにドリンスク地区出土の内耳土器である。形態が類似しており，ともに２単位の内耳と口縁部上の突起が特徴的である。外面には炭化物が厚く付着しているにもかかわらず，何段もの粘土紐の輪積痕が明確に確認される。内耳はアーチ状で，長さ５cm以上と比較的大きい。

図3-1はコルサコフ地区出土の完形の内耳土器，図3-2～６も同じくコルサコフ地区出土の内耳土器片である。図3-7，８の出土地は不明であるが，７は内耳が２単位で，サ

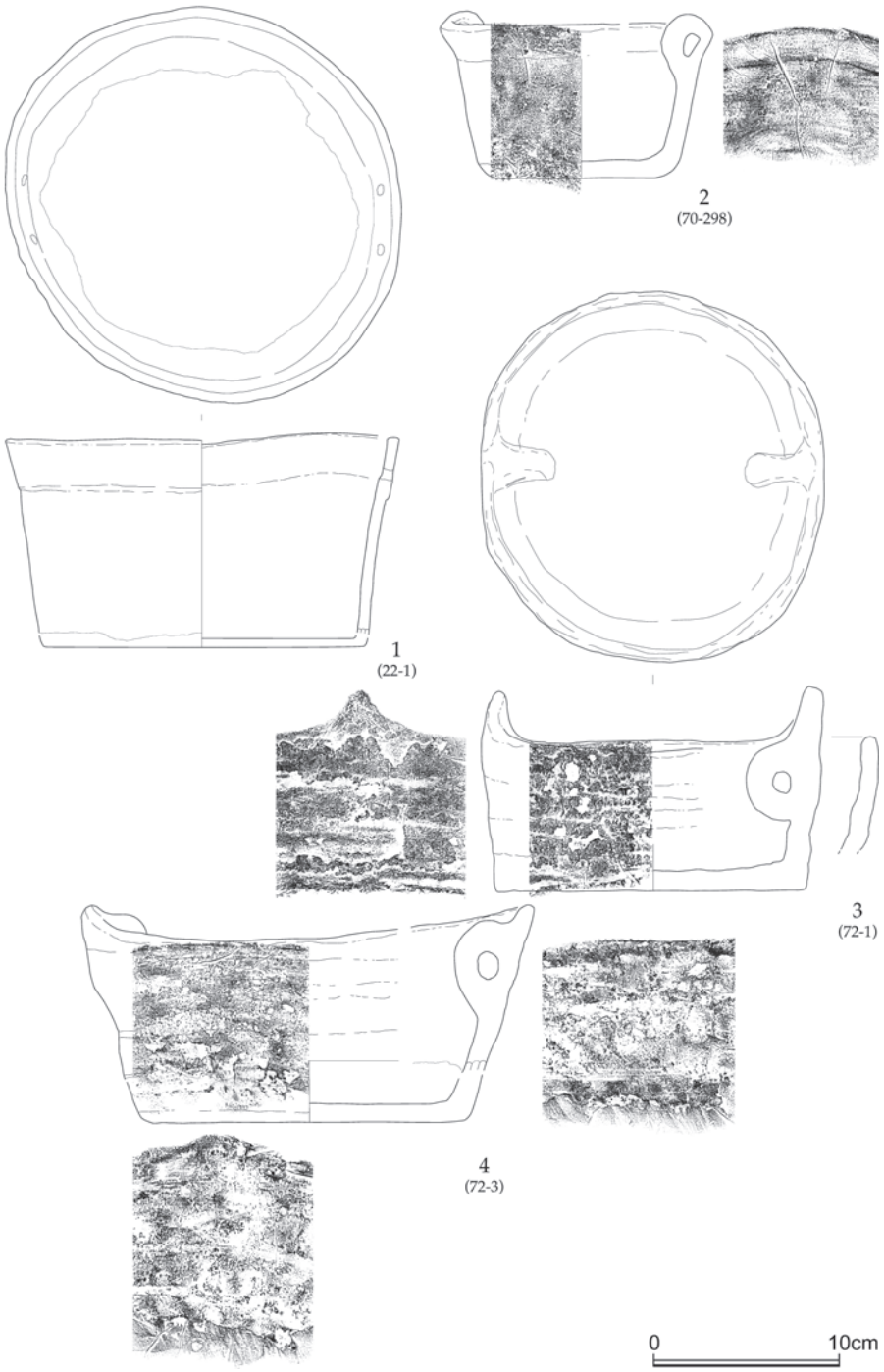



**図2　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器（1）**
（1–2: ネヴェリスク地区，3–4: ドリンスク地区，カッコ内は博物館の収蔵番号，筆者実測，
Такасэ 2021）

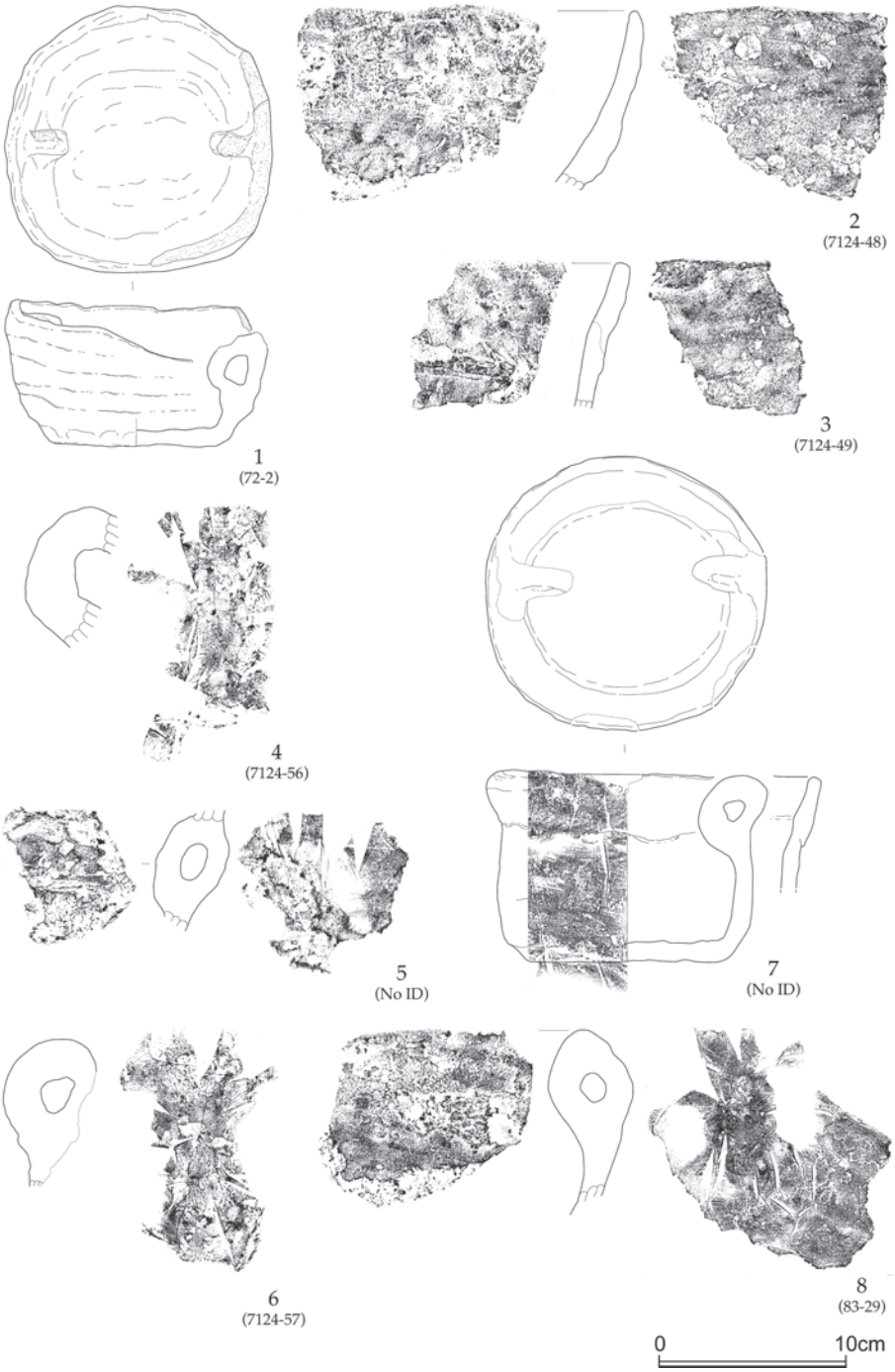



**図3　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器（2）**
（1－6：コルサコフ地区，7－8：出土地不明，カッコ内は博物館の収蔵番号，筆者実測，Такасэ 2021）

イズが小さい点からみて，サハリン島出土とみてよいと思われる。8 には上端が口縁端部に接する大きな内耳があり，やや曲がった器壁を有している点で深草（高瀬・鈴木 2013）などに類例があり，やはりサハリン島出土と考えられる。7 のつくりは丁寧で，形態は図2–2に類似している。口縁部内面には幅広で浅い溝，口縁部外面には段が形成されている。8 の内面には幅広で浅い溝はない。外面には炭化物が厚く付着している。

図 4 は，サハリン島南部のなかでも北側から出土した資料である。図4–1～ 5 は多来加湾に面するポロナイスク地区出土，図4–6は西海岸のウグレゴルスク地区出土である。プロムスロヴォエ遺跡群をはじめとするポロナイスイク地区出土の内耳土器は，ウラジーミル・フェドルチクとワレリー・ゴルベフ（Федорчик и Голубев 1988）が紹介している。これらの資料はポロナイスク郷土博物館に保管されていると思われるが，資料の特徴からみてここでの検討資料との重複はないようである。水平方向に内耳が付された横耳の資料が多いのがこの地域の特徴であり（Федорчик и Голубев 1988），ここで検討しているコレクションにも横耳の資料がみられる（図4–1，2）。破損しているため確実ではないが，図4–4もその可能性がある。内耳がない土器片もふくめ，これらポロナイスク地区出土の資料には幅広で浅い溝がなく，口縁の突起もない。図4–2，3，5 の器壁にある孔は焼成後に穿孔された補修孔である。フェドルチクとゴルベフ（Федорчик и Голубев 1988）が報告している横耳を有する内耳土器のスケッチには口縁部に円形刺突文列のような文様が施されているが（本文では言及されていない），ここで検討している資料中にはそうした文様をもつものはない。図4–6には，長さ 7 cm 以上の大きな内耳とその上部に突起が作出されている。

図 5 は，すべて択捉島中央部太平洋側のカサトカ湾（単冠湾）出土の内耳土器である。図5–1，2 はサイズの小さな内耳土器の破片を図上で復元したものである。焼成前穿孔がみられる図5–2には内耳がないが，他に比定できる型式がないため内耳土器にふくめた。図5–1の口縁部内面には幅広で浅い溝が，口縁部外面には明確な段が確認できる。サハリン島から出土した図2–2や図3–7と類似しているが，内耳が口縁端部に接するのではなく，そこからやや下がった位置に付されている。図5–3，4 はともに内耳をともなう土器片である。3 のつくりは悪く，胎土・焼成も不良である。内耳の一部が欠損しているが，おそらく長さ 5 cm 以上の大きなアーチ状の内耳になると思われる。対照的に，図5–4はきわめて丁寧な作りで，口縁内面の幅広で浅い溝や，口縁外面の段が明確に作出されている。内耳は長さ 8 cm ほどの大きなものであるが，内耳の下半部のほうが厚く作出されている。入念な内外面の器面調整や，断面が尖り気味となる口唇部はあまり類例がないと思われる。

図 6 および 7 は，すべて北千島の占守島出土である。本論文で図示した資料のなかでは，これらだけがナルィチェヴォ文化に属する内耳土器である。図6–1～ 3，図7–1は2016年の KAAP の調査で別飛川左岸遺跡において回収された表面採集資料であり，接合

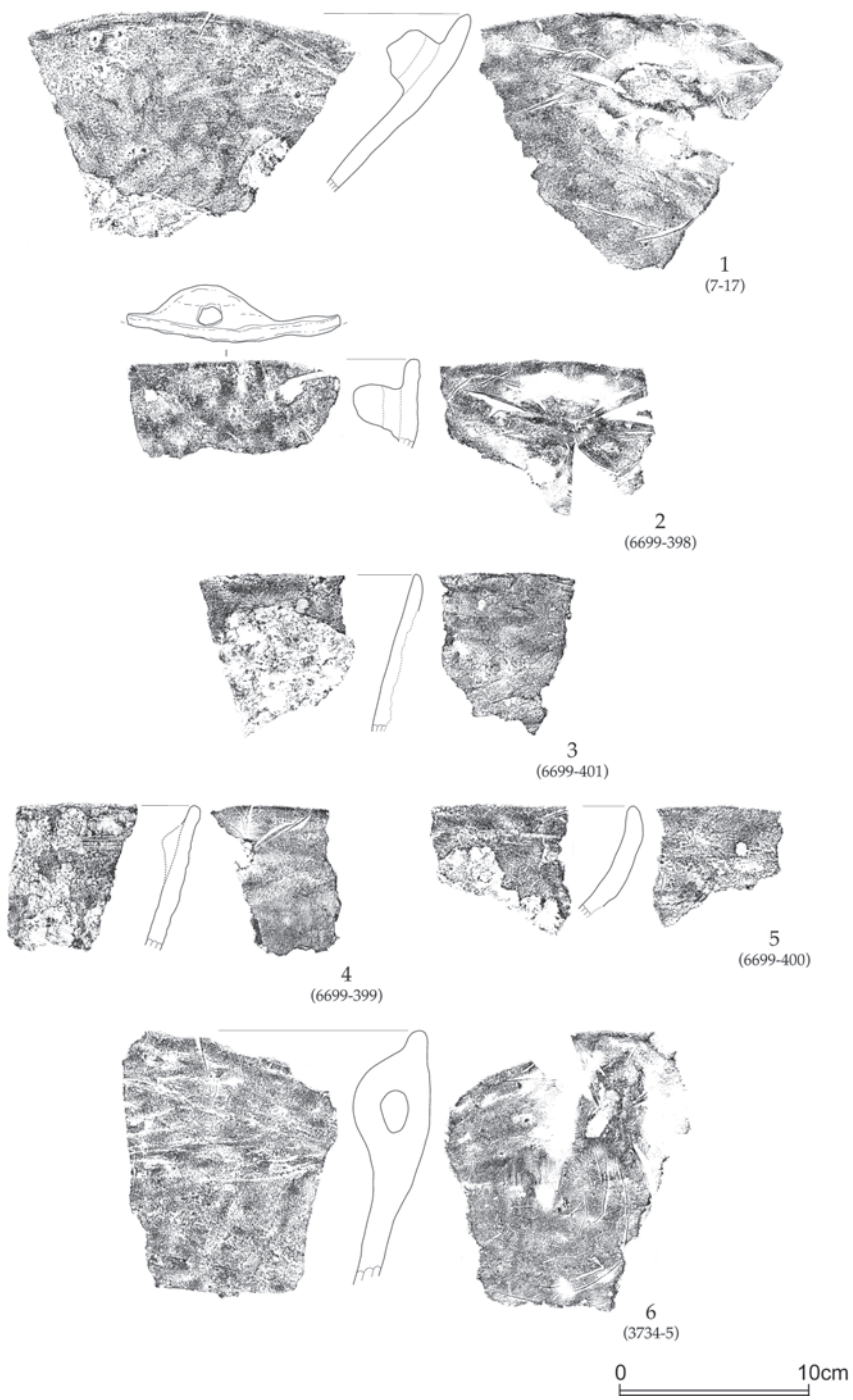



**図 4　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器（3）**
（1–5：ポロナイスク地区，6：ウグレゴルスク地区，カッコ内は博物館の収蔵番号，筆者実測，Такасэ 2021）

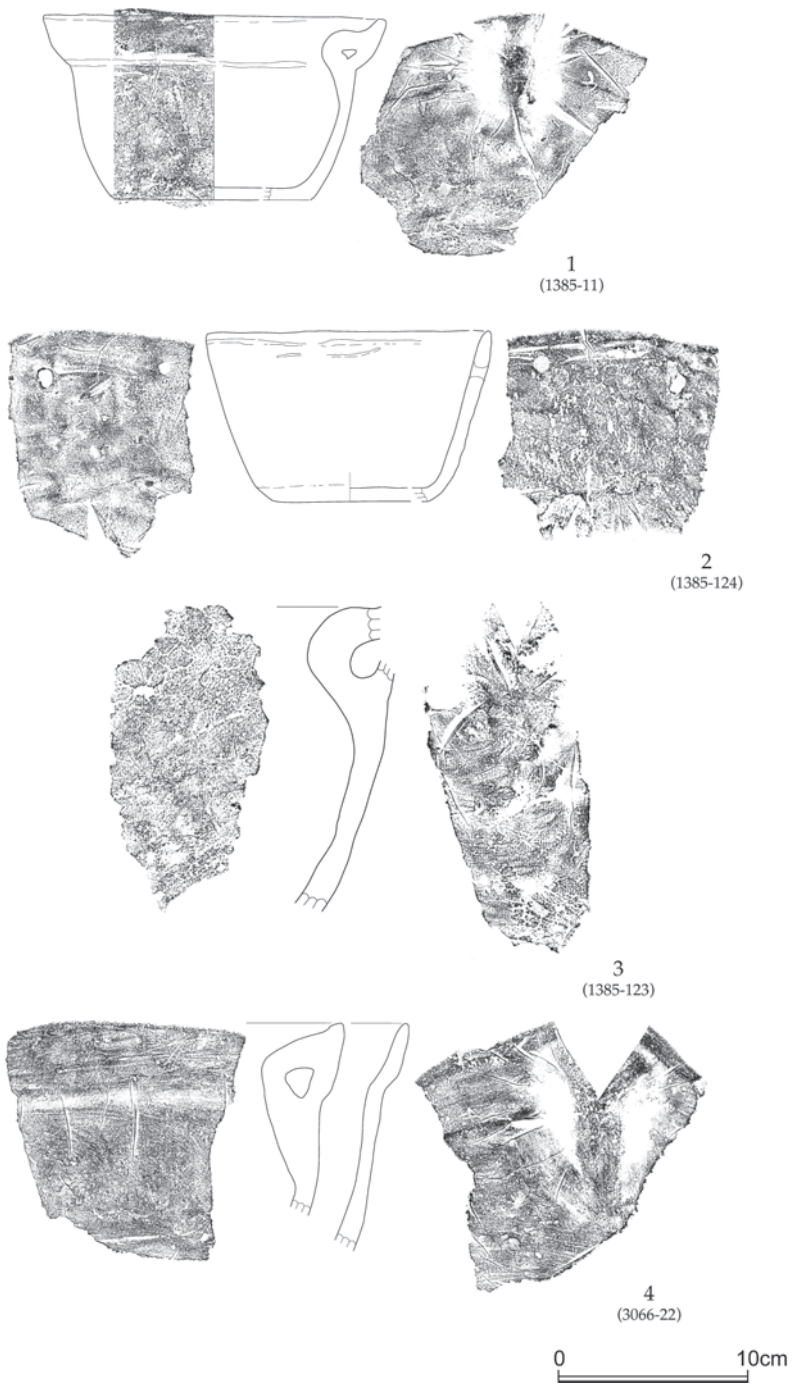



**図5　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器（4）**
（1–4: カサトカ湾（択捉島），カッコ内は博物館の収蔵番号，筆者実測，Такасэ 2021）

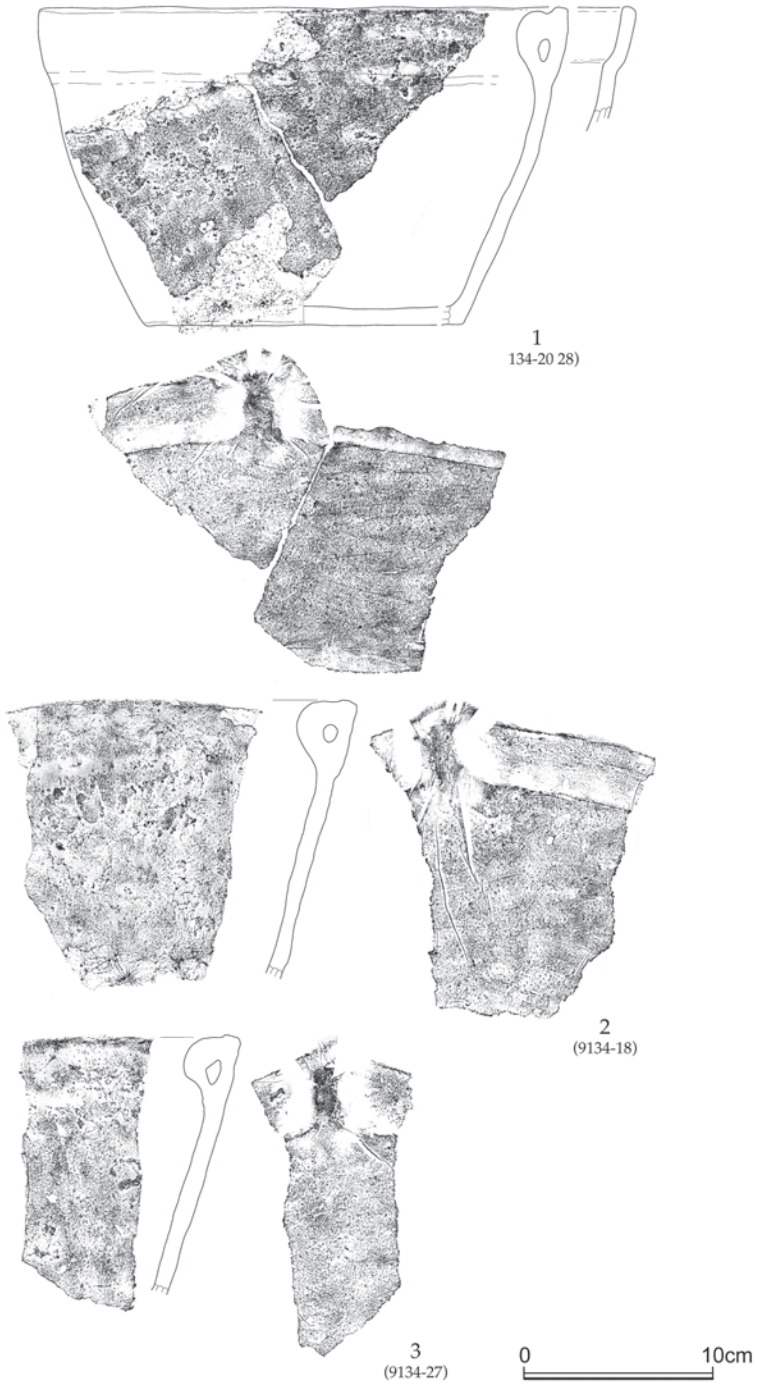



**図 6　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器（5）**
（1－3：占守島，カッコ内は博物館の収蔵番号，筆者実測，Такасэ 2021）

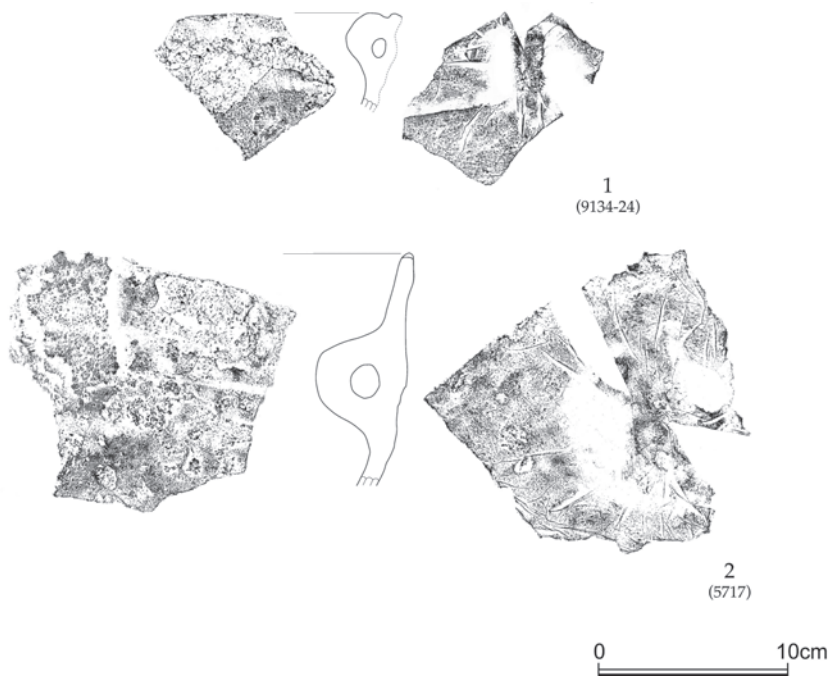



**図7　サハリン郷土博物館収蔵内耳土器（6）**
（1–2：占守島，カッコ内は博物館の収蔵番号，筆者実測，Такасэ 2021）

はしないものの同一個体と思われる破片である。口縁部内面には幅広で浅い溝，口縁部外面にはやや不明瞭ながらも段が形成されており，突起はない。外面には炭化物が厚く付着している。図7–2にも，外面に厚い炭化物が付着している。口縁部内面には幅広で浅い溝は確認されない。波状口縁の頂点に二個一対の小さな突起があり，長さ 7 cm 以上の大きなアーチ状の内耳が口縁端部よりもかなり下がった位置に付されている。図6–1〜3，図7–1は Ia 式，図7–2は II 式に比定される。

## 7.2　ナルィチェヴォ文化との比較

以上の観察をふまえると，サハリン島や南千島から出土した内耳土器は，これまでにも指摘されてきたとおり（長田 2008; 高瀬・鈴木 2013），二個一対の内耳とその上部に突起が付されるものが多く，器壁に輪積みの痕跡をのこすものや口径が小さい（20cm 以下）ものが多いことがわかる。これらはナルィチェヴォ文化の内耳とは異なる特徴である。

また，カムチャツカ南部や北千島では，口縁端部から少し下がった箇所に内耳が付されるのが通例であるが（図 6，7），サハリン本島では突起がある場合をのぞくと内耳の上部が口縁端部に接しているものが多い（図2–2，図3–1，7）。ポロナイスク地区で多

い横耳の類例はカムチャツカ南部にはないが，北千島にはある可能性が指摘されている（高瀬 2013）。しかし，出土地の情報が確実ではなく，たとえそれが北千島出土であったとしてもナルィチェヴォ文化での横耳は稀有な存在であることは確実である。それ以外の土器の属性（内耳の大きさや形態，口径，器面調整の丁寧さなど）にも違いがあるため，横耳がすぐにサハリン島とナルィチェヴォ文化の直接的な系譜関係を示すことにはならないであろう。

このように，ナルィチェヴォ文化の内耳土器とは隔たりが大きい一方で，類似性が認められる資料も存在している。図2–1に示すネヴェリスク地区出土の内耳土器は器壁が薄く，丁寧に器面が調整されている。口縁部には突起がなく，外面の段と内面の浅く幅が広い溝も明確に作出されており，一見してサハリン本島から出土したその他の内耳土器とは異なる特徴を有している。カムチャツカ南部や北千島から出土したとしても，それほど違和感のない形態的な特徴をそなえている。しかしながら，内耳ではなく二個一対の孔があけられている点で決定的な違いがあるため，ナルィチェヴォ文化 Ia 式内耳土器の祖型と断言することはできない。

南千島の内耳土器も粗雑に作られたサイズの小さなものが多く，厚い器壁からみてもナルィチェヴォ文化の土器の祖型となりそうなものは少ない。そのなかにあって，図5–1に示した内耳土器は，サイズは小さいが全体が丁寧に作られており，比較的うすい器壁，口縁部外面の段と内面の溝，小さな内耳，無文で突起がない，内耳上端が口唇部よりも下がるなどの特徴を有している点が注目される。しかし，内耳の断面形が三角形ではなく丸みを帯びているため，やはりカムチャツカ南部・北千島の内耳土器の祖型であると断言することはできない。ナルィチェヴォ文化の Ia 式の内耳土器のなかでもとくに古い段階においては，内耳鉄鍋の内耳の形態も忠実に模倣されており，内耳が小さいだけでなく，その断面形が三角形に近くなると考えられるからである（Takase and Lebedintsev 2016）。それでもなお，図5–1はナルィチェヴォ文化の Ia 式に近い資料が択捉島に存在している可能性を示唆しているとみることはできる。このほか，図5–4も非常に丁寧に作られており，内耳が断面三角形を呈する。ただし，内耳はかなり大きく，その下部がかなり分厚くなっている点で，カムチャツカ南部・北千島の最古の内耳土器とは異なる。すべての資料を概観すると，内耳の有無をのぞけば図5–1がナルィチェヴォ文化の古い段階の内耳土器にもっとも近い。

以上のとおり，サハリン郷土博物館のコレクションのなかには，カムチャツカ南部・北千島の最古の内耳土器の祖型と断言できる土器は発見することはできなかった。しかし，その可能性があるものはサハリン島と南千島の双方に見出すことができた。サハリン起源説と南千島起源説はまだどちらも有望な仮説であり，今後も内耳土器の調査を継続することが必要である。

## 8 結論

本論文の結論は，以下の通りである。

千島アイヌの起源にかかわる学説は，北海道起源説，サハリン起源説，南千島起源説の3つに整理される。このうち，後二者が有望な仮説である。

仮説の検証のためには，ナルィチェヴォ文化における最古段階の内耳土器の祖型になりえる土器の探索が有効な手段となる。ターゲットとなるのは，日本の中世鉄鍋の形態学的特徴を比較的忠実に再現した内耳土器である。

このような視点でサハリン郷土博物館の収蔵資料を検討した結果，やはりサハリン島と南千島には候補になりえる資料が存在していることが判明した。しかし，いずれの地域でもまだ決定的な証拠が欠落しているため，千島アイヌの故地を特定するには至らなかった。

今後の課題として，本論文で取り上げることができなかった資料の検討があげられる。サハリン島では西海岸のネヴェリスク地区が重要になるが，2017年に筆者がネヴェリスク市の郷土博物館を訪問した際には内耳土器は展示されておらず，収蔵品のなかにも内耳土器はないとのことであった。このほか，内耳土器が多数収蔵されているポロナイスク郷土博物館のコレクションも，調査の優先度が高い。そのほかの各地域の博物館についても，展示資料だけでなく収蔵品もふくめて悉皆的に調査する必要性が残されている。なお，日本に保管されているサハリン島出土資料についてはほぼ調査が終わっており，それらのなかには本論文の問題との関連で注目すべき資料は見出すことができていない。

南千島出土資料に関しても，日本国内で実見が可能なものについてはほぼ調査は終了している。そのなかには，おそらくもっとも重要な地域となる択捉島の資料も含まれてはいるが，千島アイヌの起源に直結しそうな資料は発見されていない（高瀬・加藤 2016）。ビザなし交流の枠組みのなかで北方四島の調査を行ってきている右代啓視氏からの私信によれば（2021年7月），少なくともこれまで目にした現地博物館等での展示資料のなかに内耳土器はないとのことである。サハリン本島における各地の小規模な博物館に南千島の資料が収蔵されている可能性は低いため，のこる候補としてあげられるその他のコレクションはサハリン州全域で調査を実施してきているサハリン国立大のそれであろう。筆者は同大の考古学博物館に展示されている内耳土器は見学したことがあるが，展示品以外の資料はまだ調査を行っていない。また，同大学で調査をすすめている南千島の新しい出土資料についても，詳細を把握していない。今後，これらの調査が必要となるであろう。

それにしても，もっとも充実した部類にはいるサハリン郷土博物館の収蔵資料を検討しても，いまだ千島アイヌの故地が特定できていないのは不可解とも感じる。15〜17世

紀段階のナルィチェヴォ文化の遺跡や遺構の数からみて，相当な数の人口が移住することによって千島アイヌが成立したと思われ，その故地においてもかなりの数の遺跡や遺物が残されていてもおかしくないからである。とはいえ，筆者自身もこれまでに発掘された内耳土器のすべてを確認できているわけではない。くわえて，いま問題としている時期（14世紀〜15世紀前半）も，内耳土器の存在時間幅のなかではごく一部にすぎないため，資料全体に占める割合は小さいと予測される。このため，土器の調査は今後も粘り強く継続していく必要である。

**謝辞**

本論文の執筆に関係して，以下の方々から資料利用の許可，有益なコメント，貴重な文献をいただいた。内容の過誤は筆者の責に帰すことはいうまでもないが，賜ったご助力に対して記して感謝申し上げる。Y. Y. アリン氏・O. A. シュービナ氏（サハリン郷土博物館），I. A. サマリン氏（戦勝博物館），A. V. プタシンスキー氏（カムチャツカ国立大学），B. フィッツュー氏（ワシントン大学），小杉康氏（北海道大学），瀬川拓郎氏（札幌大学），右代啓視氏（北海道博物館）。本論文の内容の一部は，国立民族学博物館共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化，現状，未来に関する学際的比較研究── 人類史的視点から」の研究集会（2020年12月 5 日）における報告にもとづいている。当日，共同研究員の方々からも研究の質の改善に役立つ質問やコメントを頂いた。あわせて感謝申し上げる。本研究は，日本学術振興会科学研究費補助金（JP15H01899）による研究成果の一部である。

## 注

1）本論文の趣旨から大きくそれるため，松本の研究の評価には詳しく立ち入らない。ただし，「後北$C_2$・D式土器とアイヌ語系地名の分布の類似性にもとづけば，その地名がそれらの土器の使用者たちの言葉だったとの推測は容易である。それ以外の時期にこのような分布域を示す土器も他の物質文化もない」（松本 2013: 67）と断言されているように，物質文化と言語の結びつきについてはかなり楽観的な姿勢が表明されている。しかし，松本が扱っているのは，無人状態の地域に以前とはまったく異なる文化伝統をもった集団が入植してくるケースである（松本 2006; 2011; 2013; 2015; 2020）。なおかつ，文献史料からも当時の言語集団の状況がある程度推察できるという特集な事情があるからこそ，こうした議論ができることは明確に自覚される必要があり，記述にあたっても強調されなければならない。少なくとも，松本のような研究があらゆる時代・地域で可能となるわけではない。

2）このほか，竪穴住居も千島アイヌの起源を探るためには有効な手がかりとなるが，ナルィチェヴォ文化以外では詳しいほとんど情報がないためまだ比較研究をおこなうことができない。

# 参照文献

＜和文＞

秋月俊幸

2014 『千島列島をめぐる日本とロシア』札幌：北海道大学出版会。

石井淳

1997 「北日本における後北C2-D 式期の集団様相」『物質文化』63: 23–35。

石附喜三男

1986 『アイヌ文化の源流』札幌：みやま書房。

磯部精一

1936 『和愛・愛和アイヌ語辞典』東京：東京實業社。

宇田川洋

1992 「アイヌの墓の成立過程」岡田宏明・岡田淳子編『北の人類学──環極北地域の文化と生態』pp. 257–281，京都：アカデミア出版。

2001 『アイヌ考古学研究・序論』札幌：北海道出版企画センター。

大場利夫

1950 「モヨロ貝塚出土の骨角器雑考」『考古学雑誌』63(4): 25–29。

1959 「北辺の先史文化」八幡一郎編『世界考古学大系　第1巻　日本1』pp. 126–143，東京：平凡社。

大塚利恵・上野愛里・倉重裕美・中田恭平・山下真悟・坂田亜里紗

2008 『サハリンアイヌ語辞典』旭川：北海道教育大学旭川校談話語用論ゼミ。

長田佳宏

2008 「北方域における内耳土器編年について」『北方島文化研究』6: 37–58。

萱野茂

2002 『萱野茂のアイヌ語辞典　増補版』東京：三省堂。

川上淳

2011 『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』札幌：北海道出版企画センター。

2020 『千島通史の研究』札幌：北海道出版企画センター。

菊池徹夫

1984 『北方考古学の研究』東京：六興出版。

菊池俊彦

1995a「カムチャダールとアイヌ──その文化的交流」菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』pp. 348–357，札幌：北海道大学出版会（初出：1989「カムチャダールとアイヌ──その文化的交流」『日本シベリア学会報』14: 4–10）。

1995b「カムチャツカ半島の寛永通宝」菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』pp. 326–347，札幌：北海道大学出版会（初出：1990「カムチャツカ半島出土の寛永通宝」北海道・東北史研究会編『北からの日本史　第2集』pp. 60–89，東京：三省堂）。

2004 「ディーコヴァの南カムチャツカの古代文化研究」菊池俊彦『環オホーツク海古代文化の研究』pp. 193–204，札幌：北海道大学出版会（初出：1985「書評　T. M. ディコワ著『南カムチャトカの考古学──アイヌの移住の問題と関連して』」『北海道考古学』21: 121–126）。

北構保男
1988「名取武光先生とラブレット」『北海道考古学』24: 16–19。
熊木俊朗
2015「オホーツク文化とアイヌ文化」『季刊考古学』133: 80–81。
小杉康
1996「アイヌの杓子」『物質文化』61: 18–45。
1997「物質文化からの民族文化誌的再構成の試み――クリールアイヌを例として」『国立民族学博物館研究報告』21(2): 391–502。
児玉作左衛門・大場利夫
1957「ラブレット（LABRET）について」『北方文化研究報告』13: 271–293。
コラー，S.
2002「安永年間の蝦夷地における日露交渉と千島アイヌ」『北大史学』42: 56–79。
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編
2001『よみがえる北の中・近世――掘り出されたアイヌ文化』札幌：財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構。
佐々木史郎
2014「鳥居龍蔵が出会った北方民族――千島アイヌ」J. クライナー編『日本とは何か』pp. 78–96，東京：東京堂出版。
鈴木建治
2014「千島アイヌの石ランプ」『北海道考古学』50: 151–166。
2017「千島アイヌの犬橇」『物質文化』97: 93–112。
瀬川拓郎
2011「アイヌ史における新たなパースペクティブ」蓑島栄紀編『アイヌ史を問いなおす――生態・交流・文化継承』（アジア遊学139）pp. 14–30，東京：勉成出版。
2013『アイヌの沈黙交易――奇習をめぐる北東アジアと日本』東京：新典社。
2015『アイヌ学入門』東京：講談社。
2016『アイヌと縄文』東京：筑摩書房。
添田雄二・青野友哉・三谷智広・永谷幸人・菅野修広・松田宏介・中村賢太郎・杉山真二・渋谷綾子・宮地鼓・甲能直樹・渡邊剛
2018「小氷期最寒冷期と巨大噴火・津波がアイヌ民族に与えた影響 III」『北海道博物館研究紀要』3: 119–132。
高瀬克範
2007「『ラブレット』をめぐる諸問題――カムチャツカ半島アヴァチャ遺跡出土資料の使用痕分析とその周辺」『北方圏の考古学』I: 69–79。
2013「河野コレクション（旭川市博物館収蔵）の内耳土器」『北大史学』53: 1–16。
2014「続縄文文化の資源利用――隣接諸文化との比較にもとづく展望」『国立歴史民俗博物館研究報告』185: 15–61。
2015a「カムチャツカ半島南部出土内耳土器とその千島アイヌ史上の意義」『論集忍路子』IV: 17–45。
2015b「オホーツク海北岸・カムチャツカ半島からみた『サハリン・千島ルート』」高瀬克範編『「サハリン・千島ルート」再考』pp. 61–94，札幌：北海道考古学会。

高瀬克範・加藤克
2016 『千島列島出土考古資料目録』（北大植物園資料目録第 8 号）札幌：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。
高瀬克範・鈴木建治
2013 「馬場コレクションの再検討──北千島の竪穴住居・土器・石器の基礎的研究」『北海道大学文学研究科紀要』140: 1–56。
高山純
1969 「古アジア族のレイブレット（口唇装飾具）とモヨロ貝塚出土の類似品の再検討」『物質文化』13: 22–40。
東京大学文学部考古学研究室編
1980 『ライトコロ川口遺跡』東京：東京大学文学部。
鳥居龍藏
1901 「北千島以外に内耳土器の種類は存在する乎」『東京人類学会雑誌』188: 58–63（再録：鳥居龍藏 1979『鳥居龍藏全集 7 』pp. 92–95，東京：朝日新聞社）。
1903 『千島アイヌ』東京：吉川弘文館（再録：鳥居龍藏 1976『鳥居龍藏全集 7 』pp. 1–98，東京：朝日新聞社）。
1953 『ある老学徒の手記』東京：朝日新聞社（再刊：鳥居龍藏 2013『ある老学徒の手記』東京：岩波書店）。
1976[1919]「考古学民族学研究・千島アイヌ」鳥居龍藏『鳥居龍藏全集 5 』小林知生訳，pp. 311–553，東京：朝日新聞社。
中川裕
1995 『アイヌ語千歳方言辞典』東京：草風館。
1996 「言語地理学によるアイヌ語の史的研究」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2: 1–17。
服部四郎・知里真志保
1960 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的分析」『民族学研究』24(4): 307–342。
馬場脩
1979a「北千島占守島に於ける考古学的調査報告」馬場脩『樺太・千島考古・民族誌 1 』pp. 33–66，札幌：北海道出版企画センター（初出：1934『人類学雑誌』49(2): 39–63）。
1979b「考古学上より見たる北千島（一）」馬場脩『樺太・千島考古・民族誌 3 』pp. 9–115，札幌：北海道出版企画センター（初出：1939『人類学・先史学講座10』pp. 1–107，東京：雄山閣）。
1979c「考古学上より見たる北千島（二）」馬場脩『樺太・千島考古・民族誌 3 』pp. 117–162，札幌：北海道出版企画センター（初出：1939「考古学上より見たる北千島（二）」『人類学・先史学講座 11』pp. 109–154，東京：雄山閣）。
1979d「日本北方地域及び附近外地出土の『内耳土鍋』に就いて」馬場脩『樺太・千島考古・民族誌 3 』pp. 163–266，札幌：北海道出版企画センター（初出：1940『人類学・先史学講座 14』pp. 1–104，東京：雄山閣）。
1979e「千島に於けるアリュート族」馬場脩『樺太・千島考古・民族誌 1 』pp. 148–181，札幌：北海道出版企画センター（初出：1943「千島に於けるアリュート族（一）」『民族学研究』9(8): 773–794，1943「千島に於けるアリュート族（二）」『民族学研究』9(9): 877–890）。

樋口知志
1996 「渡島のエミシ」鈴木靖民編『古代王権と交流 1 古代蝦夷の世界と交流』pp. 73–101，大阪：名著出版。
平山裕人
2014 『アイヌの歴史──日本の先住民族を理解するための160話』東京：明石書店。
藤本強
1965 「オホーツク文化の葬制について」『物質文化』6: 15–35。
プタシンスキー，A. V.／高瀬克範
2006 「カムチャッカ半島東海岸，ナルィチェヴォ 9 遺跡の発掘調査」北アジア調査研究報告会実行委員会編『第 7 回北アジア遺跡調査報告会』pp. 61–64，札幌：北アジア調査研究報告会実行委員会。
2007 「カムチャツカ州アヴァチャ 1 およびナルィチェヴォ 9 遺跡の調査」北アジア調査研究報告会実行委員会編『第 8 回北アジア調査研究報告会』pp. 7–10，東京：北アジア調査研究報告会実行委員会。
2008 『ナルィチェヴォ 9 遺跡発掘調査報告書　Результаты раскопок на Налычево-9（2006–2007 гг.)』ペトロパヴロフスク・カムチャツキー：国立カムチャツカ大学。
麓慎一
2007 「北千島アイヌの改宗政策について──色丹島におけるアイヌの改宗政策と北千島への帰還問題を中心に」『立命館言語文化研究』19 (1): 43–55。
2011 「報效義会のシュムシュ島への移住とシコタン島のアイヌ帰還問題」『新潟大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』4 (1): 41–50。
2014 「千島列島へのアイヌの出稼ぎ問題について──報效義会と千島アイヌ」『新潟大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』6 (2): 155–167。
松本建速
2006 『蝦夷の考古学』東京：同成社。
2011 『蝦夷とは誰か』東京：同成社。
2013 「東北北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か」『考古学研究』60 (1): 55–77。
2015 「考古学からみた古代の東北北部域の言語」『岩手史学研究』96: 61–85。
2020 「エミシの言葉と考古学──人口非増加社会から人口増加社会への変化」『世界と日本の考古学──オリーブの林と赤い大地』（常木晃先生退職記念論文集）pp. 457–477，東京：六一書房。
間宮林蔵述，村上貞助編
1811 『東韃地方紀行他』東京：平凡社（1988 洞富雄・谷澤尚一編注)。
1855 『北蝦夷図説』東京：名著刊行会。
村崎恭子
1963 「千島アイヌ語絶滅の報告」『民族学研究』27 (4): 51–55。
村山七郎
1987 『クリル諸島の文献学的研究』東京：三一書房。
八木光則
2019 「縄文時代にさかのぼるアイヌ語系地名」御所野縄文博物館編『環状列石ってなんだ』pp. 145–166，東京：新泉社。

安本美典・野崎昭弘
1976 『言語の数理』東京：筑摩書房。
山浦清
1989 「考古学から見た北千島の文化的位置づけ」北方言語・文化研究会編『民族接触──北の視点から』pp. 298–308，東京：六興出版。
山田秀三
1983 『アイヌ語地名の研究　第２巻　アイヌ語地名の川と峠』東京：草風館。
山本裕弘
1943 『サハリンアイヌの住居』東京：相模書房。

＜欧文＞
Диков, Н. Н.
1979 *Древние культуры северо-восточной Азии*. Москва: Наука.
Дикова, Т. М.
1983 *Археология южной Камчатки в связи с проблемой расселения айнов*. Москва: Наука.
Долгих, Б. О.
1960 *Родовой и племенной состав народов Сибири в XVII веке* (Труды института этнографии им. Н. Н. Миклухо-Маклая. Новая серия, т. LV). Москва: Изд-во АН СССР.
Федорчик, В. Д. и В. А. Голубев
1988 Новые материалы об айнских поселениях в Поронайском районе. *Айны: проблемы и истории и этнографии*, с. 131–142. Санкт-Петербург: Музей Антропологии и Этнологии им. Петра Великого.
Fitzhugh, B., M. Etnier, B. MacInnes, S. C. Phillips, and J. Taylor
2007 *Report of Archaeological Field Research in 2006, Including Geographical Descriptions of Archaeological Locales*. Seattle: Department of Anthropology, University of Washington.
Fitzhugh, B., M. Etnier, S. C, Phillips, and E. Gjesfjeld
2009a *Report of Archaeological Field Research in 2008*. Seattle: Department of Anthropology, University of Washington.
Fitzhugh, B., E. W. Gjesfjeld, W. A. Brown, M. J. Hudson, and J. D. Shaw
2016 Resilience and the Population History of the Kuril Islands, Northwest Pacific: A Study in Complex Human Ecodynamics. *Quaternary International* 419: 165–193.
Fitzhugh, B., S. Moore, C. Lockwood, and C. Boone
2004 Archaeological Paleobiogeography in the Russian Far East: The Kuril Islands and Sakhalin in Comparative Perspective. *Asian Perspectives* 43(1): 92–122.
Fitzhugh, B., S. C. Phillips, M. Etnier, S. Anderson, J. Taylor, M. Walsh, B. MacInnes, and J. Bourgeois
2009b *Report of Archaeological Field Research in 2007, Including Geological Descriptions of Archaeological Locales*. Seattle: Department of Anthropology, University of Washington.
Hodder, I.
1991 *Reading the Past: Current Approaches to Interpretation in Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jochelson, W.
1928 *Archaeological Investigations in Kamchatka*. Washington DC: Carnegie Institution of Washington.
Krasheninnikov, S. P.
1755 *The History of Kamchatka and the Kurilski Islands, with the Countries Adjacent*. Translated by J. Greive in 1764. London: Glocester.
Milne, J.
1882 Notes on the Koko-poku-guru or Pit-dwellers of Yezo and the Kurile Islands. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 10: 187–198.
Murayama, S.
1970 Ainu in Kamchatka. *Bulletin of the Faculty of Letters Kyushu University* 12: 55–77.
Оглоблин, Н.
1891 Две сказки Вл. Атласова об открытии Камчатки. *Чтения в императорском обществе истории и древностей российских при московском университете*, с. 3–18. Москва: Университетская Типография.
Пономаренко, А. К.
1985 *Древняя культура ительменов восточной Камчатки*. Москва: Наука.
2000 *Древняя культура ительменов Камчатки*. Петропавловск-Камчатский.
Пташинский, А. В.
2012 *Отчет об археологических исследованиях в Елизовском, Быстринском, Соболевском и Усть-Большерецком районах Камчатского края в 2011 году*. Петропавловск-Камчатский: Камчатский государственный университет имени Витуса Беринга.
Руденко, С. И.
1948 Культура доисторического населения Камчатки. *Советская Этнография* 1: 149–154.
Sato, T. and A. Bugaeva
2019 The Study of Old Documents of Hokkaido and Kuril Ainu: Promise and Challenges. *Northern Language Studies* 9: 67–93.
Steller, G.
1774 *Steller's History of Kamchatka*. Translated by M. Engel and K. Willmore in 2003. Fairbanks: University of Alaska Press.
Шубин, В. О.
1992a История поселений Российско-Американской компании на Курильских островах. *Краеведческий Бюллетень* 1992 (3): 12–64.
1992b Новые материалы о переселении «Курильцев» на Камчатку. *Краеведческий Бюллетень* 1992 (4): 15–36.
Takase, K.
2013 Chronology and Age Determination of Pottery from the Southern Kamchatka and Northern Kuril Islands, Russia. *Journal of the Graduate School of Letters Hokkaido University* 8: 35–61.
2014 Radiocarbon Dating of Pottery from Karaga Bay Coast, Northern Kamchatka, Russia. *Journal of the Graduate School of Letters Hokkaido University* 9: 1–27.
2020 Time Period Determination of the Kuril Ainu's Major Withdrawal from Kamchatka. *Japa-*

*nese Journal of Archaeology* 8 (1): 1–21.

Такасэ, К.

2021 Изучение истории происхождения курильских айнов и современные перспективы с точки зрения археологии. *Вестник Сахалинского Музея* 2021 (3): 118–149.

Takase, K. and A. I. Lebedintsev

2016 A Study on Pottery from Southern Kamchatka in T. M. Dikova and N. N. Dikov Collections. *Journal of the Graduate School of Letters*, *Graduate School of Letters, Hokkaido University* 11: 9–36.

2019 *Illustrated Catalogue of Archaeological Materials from Kamchatka in T. M. Dikova Collection Preserved in the North-Eastern Interdisciplinary Scientific Research Institute, Far Eastern Branch, Russian Academy of Sciences* (*NEISRI FEB RAS*), *Magadan, Russia*. Sapporo: Archaeology Laboratory, Graduate School of Letters, Hokkaido University, Japan and the North-Eastern Interdisciplinary Scientific Research Institute, FEB RAS, Russia.

Такасэ, К., О. А. Шубина, Б. Фицхью, М. Этниер, К. Тэзука, И. А. Самарин, И. Г. Марков, и А. Л. Шепова

2017 Археологические исследования на острове Шумшу в 2016 году, *Вестник Сахалинского Музея* 24: 21–35.

Васильевский, Р. С.

1971 *Происхождение и древняя культура коряков.* Новосибирск: Наука.